

---

# とある茨の禁書目録

darkrad26

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある茨の禁書目録

### 【NZコード】

N9256Z

### 【作者名】

darkrad26

### 【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の世界に紛れ込んだ一人の異物。  
彼はどのような影響を物語に与えるのだろうか。

とある茨の禁書目録はじまります。

## プロローグ

『学園都市』

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ぼせながら

東京都の中央三分の一を円形に占めている。

「記憶術」だの「暗記術」といつ名田で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っている学生の街である。

その学園都市のある研究所。

普段なら置き去りなどを使って非人道的な研究を行っているが、

今は半壊しており、銃声や悲鳴が響き渡っている。

「つたぐ、この程度の研究所潰すのになんで俺が出てこなきゃならないんだよ」

そう悪態をつきながら銃弾飛び交う研究所内を歩いているのはホストのような格好をした少年。

何よりも目をひくのは背中に生えている純白の羽根だらけ。時折思い出したようにその羽根を振るい、あたりを破壊している。学園都市に8人しかいないレベル5の第一位『未元物質』垣根帝督

である。

「しょうがないじゃない。どんなにつまらない依頼でもウチに来た  
以上断れないんだから」

そう答えたのは、14歳ほどで、小柄で華奢な体つきにも拘らず、まるでホステスのような背中の開いた丈の短いドレスを着込んでいる少女。

垣根帝督とは違い、特に何もせず、一步後ろを歩いていく。

「つてかお前も仕事しちゃよ。わざわざついてきてるだけじゃねえか」

「私の能力は『メジャー・ハート心理定規』、戦闘向きじゃないんだしいいじゃない。邪魔はしないでしょ？」

「確かに邪魔はしないけどよ。わざわざついて帰りたいんだよ」

垣根はため息をつきながらそっぽやくと前方にある厳重に封鎖された扉を一瞥すると、羽根の一撃でもって跡形もなく吹き飛ばした。

「…………」

「……」

部屋に入った一人の眼に飛び込んできたのは殺氣立った研究員達ではなく、おびただしい数のおそらく研究員であろう死体。ここで迎え撃つつもりだったのだろう。銃やら駆動鎧、その他にも用途のわからない機械がそこら中に散らばっている。

それだけなら驚くことなはない。他の構成員が始末した後に自分たちが来たのかも知れないからだ。  
だがそれは撃たれたりなんなりしてただ死んでた場合のことだ。  
だがこの死体たちは例外なく全て干からびている。  
中にはまるで数千年も放置され風化したように崩れているものもある。

「これって//イラ？//今はエジプトじゃなくて日本よ？」

「体中の血液が抜かれてやがる。こんなことができるの？」

「オレだよ」

生きてる人間は誰もいないはずの部屋に声が響く。

その瞬間垣根はさらに羽根を生やし、三対の翼でもつて臨戦態勢を取り、

『心理定規』はその後ろに避難し拳銃を構える。

「警告だ、第一位。最近の行動は日に余ると統括理事会からのお達

しでな。そのせいで

このオレが派遣されたわけだ。心当たりはあるか？」

その声が聞こえてきたのは一人の頭上。なぜ気付かなかつたのだろうか。

そこにいたのは魂まで奪われそうな雰囲気を持ち、天井に直立する漆黒の青年。

片目を覆う黒い長髪を無造作に括り、オーダーメイドであろうダークスースを着こんでいる。

重力に囚われていなかまるで天井が地面だというように佇んでいる。

何よりも特徴的なのはその眼、すべてを俯瞰するような無機質な瞳だった。

「てめえ第六位か！警告なんざされる謂れはないぞ！」

そう叫びながらも内心では学園都市への反逆計画がばれたのかと焦りまくつている垣根帝督。

普段ではありえないことだが焦りや相手が第六位ということもあって思わず考え込んでしまった目を離してしまった。

気付いた時にはもう遅い。能力の相性がいいとはい、自分では第六位には勝てないのだ。

致命的な隙を晒したかと歯噛みしながらも一撃入れようと天井に視線をやる。

が、最早そこには誰もいない。

「ちつー（しゃつじ）に行きやがった）

思わず舌打ちをしながらいつでも離脱できるように周囲に饭を配る。奇襲されたらその一撃を防ぐ自身は垣根にはなかつた。

「やあ久し振りだね心理定規。よかつたらこれからトイナードもじうかな？」

「お久しぶりです北斗さん。私でよかつたらぜひお願ひします」

「やはり君は笑つてゐる方が可愛いね」

「そんな可愛いだなんて…」

悲壮な垣根とは違ひ第六位と心理定規は楽しそうに会話していた。しかもさつきの雰囲気はなんだつたのかといつほどの爽やかさである。

「北斗オオオツーーてめえ今めつちゅシリアルスだつたじゃねえかよー！」

「ひぬそこね垣根。今いじとこだらうが

「ひぬそこねよ。今北斗さんと話してゐんだから

「えつ？俺がおかしいのか？つてか息ぴつたりだなー」

一蹴である。最早その姿は可哀そうを通り越して哀れですりあつた。

そして一人は垣根を無視してまだ楽しそうに会話している。

「そういえばまだおじさん達の相手をしてるのかい？」  
「気晴らしならオレがいつでも付き合つてあげるよ」

「本当にですか！へじやあ部屋をとつてあるのでティナーの後にでも  
そこで——」

「相変わらず積極的だね。喜んで付き合わせてもらひよ」

いやいやしている。  
だが忘れているかもしないがここはミライラが転がっている部屋の  
中である。  
台なしだった。

「おー北斗。やっぱっこミライラ君はお前がやったのかよ？」

復活した垣根である。  
実際に空氣の読めない男である。

「……冷蔵庫が。……当たり前だろ？他にこんなことができる奴がい

るんなら教えてほしいものだね」

「今なんつった？ あ？ あ？」

「それで警告についてだが……」

「無視かよつ！」

黙れ冷蔵庫。そんなんだからチンピラホストって言われるんだよ」

黙りなさい冷蔵庫。北斗なんか話してるでしょ。」

「なんなんたよモ」「…」

またもや一蹴。懲りない冷蔵庫である。  
そんな垣根は無視して北斗は話を続ける。

「お前最近仕事の度に物を壊しすぎなんだよ。修繕費も馬鹿にならないらしくてな。」

借金になるらしいから…まあ頑張れ」

「……そんなことで来たのか？」

「暇だつたからな。アレイスターの頼みを断るのもあれだし」

「うう苦労まだまだな。… ちょうどいいから仕事手伝ってくれねえか?

お前の『茨棘之冠』ならすぐ終わるだろ?」

「さつきの会話を聞いてなかつたのか?オレはこれからトーントなんだから無理だ。

じゃあ行こうか?」

「はい北斗さん」

そう言つと北斗は心理定規を抱きかかえる。いわゆるお姫様抱っこだ。

何度も言おひ、いじせまハイラだらけの部屋である。

「まだ仕事が終わつてねえぞ!?」

「そんなもんお前がやれよ。何のためのレベル5だ

「男女差別反対!」

「女の子には優しくするもんだよ。

…つと、言い忘れてたが借金は12億2800万だそうだ。それ  
じゃ

「…は?ちよつ待つ?…」

垣根が詰め寄る?とするがすでにそこには一人の姿はなくただ空しく声が響くだけである。

どれほど時間がたつただろうか?呆然とする垣根の前に頭部に環状

の金属製ゴーグルをつけた少年が歩み寄る。

「リーダー終わりましたよ。……どうかしましたか？」

「…12億：ふつふふふふふふふふふふふふふふ」

「リーダーーー？」

しばらく研究所に不気味な笑い声が響き渡った。

## プロローグ（後書き）

はじめましてdarkroad26です。

この小説は妄想があふれ出た結果によるものなので見苦しいと思いま  
すが、  
感想もらえたりすると励みになります。

ちなみにこの小説の主人公は黙つていればインテリヤクザにしか見えないと  
言われた作者をモデルにしています（笑）

## 主人公紹介

名前

御門 北斗  
ミカド ホクト

容姿

外見年齢は24歳ほどだが実年齢は18歳。  
黒髪の長髪で左目を覆い尽くしており、胸辺りまでの髪を首の後ろ  
で無造作に括っている。

服装はオーダーメイドのダークスーツ。学生には全く見えない。  
顔はそこそこ整っている方だが見た目はインテリヤクザ。

能力

レベル5の第六位『茨棘之冠』  
クラウンゾーン

体表から黒く染まつた茨のようなものを生やし、自身の体及びその  
茨に触れたあらゆる物を吸収する。  
ただし固形物は吸収できない。  
副次効果として吸収したエネルギーを使って身体強化を行える。  
この能力にはまだ秘密があるようだが……

性格

黙つていれば外見も合わせて、他者を威圧するカリスマのよつなのを放つていて、  
しゃべり始めるとそこらへんにいるよつな兄ちゃん。

ただ本人は自身の外見効果を理解しており、威圧するよつな演技をしていることが多いため性質が悪い。

原作主人公のようなフラグ建築能力はないが、恋愛は得意らしく狙つた女は必ず落とすと豪語するほど。

現在は5股掛けおり修羅場が発生する日は近いのかもしない。

## 主人公紹介（後書き）

この主人公紹介はあくまで簡易的なものであり、核心には一切触れていません。

## 第一話（前書き）

短いです

「さて、今日は何をして暇を潰そうか」

そんな気の抜けた咳きをもらしたのは御門北斗、つい先日垣根帝督を恐怖（？）のどん底に陥れた男である。もつとも本人にとつては取るに足らない出来事ではあつたが。

それはともかく現在時刻はAM11：00、平日であることから彼も学校に行かなければならぬはずだが、彼に学校に行く気は全くなかった。

そもそも学校になど通つてないため、ここは学生寮ですらなく、彼が年間契約しているホテルの一室である。

「…それ私を抱きかかえながら言つセリフじゃないよね。あれか？  
私は愛玩人形かなにかか？」

そう彼の腕の中で文句を言うのは12歳程度のパンク系の衣装を着ている少女。前を揃えた黒い髪は肩甲骨の辺りまで伸びているが、アクセントのためか耳元だけが金色に色を抜かれている。

彼がリーダーを務める暗部組織『グループ』の構成員、黒夜海鳥である。

もつとも言葉とは裏腹に頬をわずかに紅潮させ完全に甘えきつてい

る。

「せりそんなに拗ねるなよ。やつあまだみたいに『一ヤー一ヤー』言つていいんだ？」

「好きで言つてたンじゃね？……北斗が猫耳アタッチメントつかせたせいだろ？がつ！」

「でも盛り上がったじゃなーか。けど十御門とキャラ被るし普段からは無理かなあ」

「うひー。でももじるな少女に手出して恥ずかしくないのかよロリコン……！」

「老若男女の区別なく、私は全てを愛してこーのー。」

「余計悪いじゃね？かつー。しかもなにでヤ顔してやがる変態ー。」

「落り着けつて。口調がどうの白もやしみたいになつてゐる？？」

「誰のせいだー。誰のー。」

「キスしてやるから機嫌なおせよ」

「うぬやーー！私がその程度で機嫌なおすよつた軽い女だと思つたら大間違いなんだよー。…………いや別にしてほしくないわけじゃないでだな、その…………んう！」

「んう（しかし暗部の女はちゅうこなあ。やっぱり優しくとかに飢

えてんのかね)」

しばらく部屋に水音が響いた後、そここいたのは骨抜きになつて眠る少女だけであった。

「……んじゅ……北斗あ……」

「外に出てきたのはいいがどうするかな？鉄網ちゃんでもデートに誘つか、アイテムの女の子でも攻略に行くか…悩むな」

つこわつさままで女の子と一緒にいたとは思えない言葉だ。まさしく女の敵である。

今日も学園都市は人で溢れかえっているが彼の歩くところだけ綺麗に人が分かれ道ができる。さながらモーゼの如く。もっとも彼には十戒など微塵もないが。

そんな彼に物好きにも近づくものがいた。

「ちょっとアンター待ちなわこよー。」

「ん? やあ、美琴ちゃんじゃないか。学校はどうしたんだい?」

「もうとっくに終わったわよ。そういうアンタは二つなのよ、二つもスーツ着てるけど学校行つてるの?。」

「もうそんな時間か。それよりなにかよつかな?」

「やつよーアンタ私と勝負しなさいー。」

「またかい? オレとしては誤つて美琴ちゃんの可愛い顔に傷でもつけたりと思つと戦々恐々だよ」

「可愛つつ…いいから勝負しなさいー! 第三位の私が第六位のアンタに負けるなんてあり得ないんだからー。」

「だからレベル5の順位は学園都市の利益が基準であつて戦闘能力には関係ないとあれほど…」

「いいからついてきなさいー! 場所を移すわよー。」

そう言つと美琴は後ろを振り返り返りもせずすんずんと歩いていった。その顔が赤かつたのは見間違いではないだろ?。実にツンデレである。

「やれやれ、不幸だ つてね」

誰にも聞こえないように咳きながら後ろをついていく彼の口元は妖しく歪んでいた。

## 第一話（後書き）

この主人公は下種です、外道です、屑です。  
場合によつては寝取りもあるかもしません。

まあ女子もばれなきゃ幸せそつですしこのです…多分（笑）

さて次話ですが今日中には書きたいと思つますがまだ内容を決めて  
ません。

このまま美琴と戦闘して能力の一端を示すか、アイテム攻略ルート  
にするか。

皆さんはどういがいいですか？

## 第一話（前書き）

アイテム攻略ルートを希望する方がいたので、<sup>v</sup>s美琴はサクッと終わらせたいと思います。

「またこの河川敷か？」

「他に暴れても平氣な場所がないんだから仕方ないでしょ」

二人がいるのはとある学区にある河川敷。ここで二人が戦うのはこれまで2回目となる。

5メートルほどの距離を置きお互いに向き合っているがその姿は正反対。

美琴は髪からバチバチと断続的に放電しており、片や北斗はポケットに両手を入れながら泰然と立っている。

「相変わらず余裕の態度よね。勝者の貫禄つてやつ？」

「余裕も何もオレに勝てそなのは『ナンバーワン最大原石』位だ」

「第七位? なんで最下位なんかに…」

「アイツは説明のできない力のせいで第七位にされてるが戦闘能力は大したものだからな。もしかしたら第一位にも勝てるんじゃないのか?」

「それは遠まわしに自分が最強って言いたいわけ？調子乗つてんじやないわよ！」

言い放つ美琴から幾条もの雷撃の槍が放たれる、まともに反応できないような速さ以上に特筆すべきはその数の多さ、逃げ場を奪うように配置された雷槍は例え初撃をかわすなり迎撃するなりしたとしても続く弾幕の前にその体中を貫かれるだろう。莫大な閃光と雷鳴と共に次々と着弾し帶電した塵を巻き上げ北斗の姿を隠す。神の怒りにも例えられるその一撃をもつてすれば人体などひとたまりもない、瞬く間にその身は焼き焦がされ命を散らすだろう。それだけの威力が雷槍には宿つていた。

「…いつまでそうしてゐつもり？手加減してないとはいえアンタならいこの程度なんでもないんでしょ」

「開幕を告げる言葉も無しの無粋な先制に呆れでいるんだ」

声が響くと同時に宙を待つっていた塵が停止する。その一瞬後引きずり込まれるように内側に風が吹き、視界が晴れた先にいるのは先ほどと一切姿勢の変わつていない北斗だった。

「あの威力といい数といいお前はオレを殺したいのか？…まあ無駄でしかないがな」

「…みたいね。じゃあこれならどうかしらつ…」

取りだしたのは一枚の「コイン」、それを親指で上に弾いたあと落ちてきたコインを莫大な速度でもって射出した。御坂美琴を象徴する能力名にもなった一撃、『超電磁砲レールガン』である。

「何かと思えば馬鹿の一つ覚えか。無駄だと言つていいだろ?」

おもむろに超電磁砲に手を伸ばし何事もなかつたかのようにその一撃を掴み取る。あの威力はどこに行つたのか、残つたのは彼の手の中の解けた「コインの残骸のみだ。

「わかつてゐるわよ。アンタの能力は純粹エネルギーを無効化なり吸収するなりしてゐるんでしょ? それなら回避不能の圧倒的質量で対処すればいい。…こんなふうに、ねつ!…」

「これは…」

「能力を応用して砂鉄を操つてんのよ。この場所なら量も申し分ない、すぐに助けてあげるから大人しく埋もれてなさい!」

「やれやれ…」

地形が変わるほどの圧倒的質量を誇る一撃。「これならばあのシンシン頭の少年すら無効化できないだろ?」美琴は確かに勝利の手だった。を感じながら北斗を救出しようと再び砂鉄を操るつとし…

「枯れ落ちる」

「えつ？」

そんな呟きと共に目の前を黒い何かで覆われ意識を手放した。

「……いくらなんでもやつすがだらう……どうすんだよこれ」

そこは先ほどレベル5同士の激突があつた河川敷……いや戦場跡だつた。美琴の最後の攻撃により土手が崩壊し川が砂鉄で黒く染まつている悲惨な光景が広がつていた。そんな爆心地に美琴を抱えた北斗は立つていた。

「ちょっと手加減間違えて必要以上に吸つちゃつたし……服なんて風化してぼろぼろだもんなー。まあなかなかいい眺めではあるな」

美琴の制服はもはや服としての機能を持つておらずいろいろと見えてはいけないものが見えている。具体的に描写しようものならすかさず規制が入るだろう。それをこの男は憚ることなく眺めている。さりげなく北斗の手が動いているように見えるのは気のせいだと信じたい。

「とりあえずオレのスーツでも着せてあげて……オセロを迎えてみさせればいいかな?…………もしもし黒子ちゃん?今 学区の河川敷にいるんだけど愛しのお姉さまがあられもない姿で……つと

切れちゃつたよ

「ほらやつて大人しくしていれば文句ないんだがな。せつかく可愛いんだからもつと素直になればいいのにもつたいたいやつ」

「…………（ピクシ）」

「ん？…………相変わらず可愛いな、食べてしまいたいへりこだ」

「お姉わがーー（ピーチ）焱のお姉わがはゞいですかのーー？」

「来たか……じゃあ続わまた今度だねお姫様…………」

「…………（ボンッ）」

『…………からかツインテールでオセロな風紀委員の声が聞こえてきたと思つと北斗は美琴の額に口づけし、その場を一瞬で立ち去つた。

「お姉さまーー？無事ですかのーー？」

「…………額に…………額に…………」

「…………お姉さまーー？」

「…………ふ」「あ

「お姉さまーー？しつかりあるドクのーーんなとこで絶してはー…………チャンス？」

「なにしてんのよー……」

「ああ、つ愛がしひれますわ……」

黒子を折檻して普段通り振舞つてみるが額を押さえて赤面していはぬなしである。

「へへつこれで仕込みは十分かな

その様子を離れた所から北斗も観察していた。

## 第一話（後書き）

昨日中に更新できなくて申し訳ありません。  
やはり戦闘シーンよりいぢやいぢやしているシーンの方が書きやすいです。

朝までにはもう一話あげたいと思いますのだが、期待ください。

一見無敵に見える主人公ですが、致命的な弱点があります。  
果たしてその弱点がいつ出てくるかわかりませんが、そこを突かれれば、子萌先生が相手でも敗北を喫します。

それでは、今回はこのへんで、感想、意見などいつでもお待ちしております。

第七学区のファミレス、昼時という時間帯でもあることから多くの学生で賑わう店内でテーブル席に陣取り異色を放つ四人組がいた。

「あれ？ 今日のシャケ弁と昨日のシャケ弁はなんか違う気がするけど。あれー？」

第四位『原子崩し（メルトダウナー）』 麦野沈利である。店外で買ってきたである「コンビニ弁当を正々堂々と食べながらそんなことを呟いては首を傾げている。

「結局さ、サバの缶詰がキてる訳よ。味噌ね、赤味噌が最高」

麦野の隣に座るのはフレンダ＝セイヴォルン。ベレー帽を被った金髪碧眼の高校生だ。缶詰を開けようとしているが上手に缶切りが使えないのか小型の爆破ツールを使って蓋を焼き切っている。

一方、フレンダの向かいに座っている、ふわふわしたワンピースを着た十一歳ぐらいの絹旗最愛という少女は、そうした他人の行動を一切気に留めず映画のパンフレットに目を通している。

「上海黃龍電影カンパニーのC級ウルトラ問題作……様々な意味で手に汗握りそうで、逆に超気になります。滝壺さんはどう思いますか？」

話を振られたのは絹旗の隣にいる滝壺理后という脱力系ピンクジャージの女の子。ソファ状の席にだらっと手足を投げ出したまま、どうとも知れない所へ視線を彷徨わせている。

「……北北東から信号がきてる……」

彼女たちは『アイテム』。

学園都市の暗部組織で、主な任務は統括理事会を含む『上層部』の暴走の阻止。『グループ』や『スクール』などと同等の機密レベルの集団である。

「そう言えば聞いたー？第一位の話。なんか仕事でミスって借金現場で超働いてるって聞きましたけど」

「私はその借金のせいで住んでたマンション追い払われて冷蔵庫工場で超働いてるって聞きましたけど」

「結局、第一位にはその程度がお似合いって訳よ」

「大丈夫。私はそんな第一位を応援してゐる」

「どうやら先日の一件は各方面に広まつてゐるらしい。本当に冷蔵庫を作つてゐるのかは定かではないが彼ならば瞬く間に工場長にまで上り詰める」ことだらけ。

そんな取りとめもない話をしている四人の隣の席にウェイトレスが客を案内してくる。御門北斗と黒夜海鳥の二人である。

「こちらのお席になります。ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

「ほり好きなもの頼んでいいぞ。腹減つてゐるだら?」

「……」こんなことでこの前置き去りにしたのを許すなんて思つなよ。そもそも私はしほりく食べなくつたつて平氣なんだ」

「シンデレだなー。エリヤ教育間違つたのや」

「シンデレじゃないー……」、この後一日付き合つてくれるなら許してやる

「はいはい、仰せのままにお姫様」

その姿は仲のいい兄妹のような、妹が大好きな兄に構つてほしくて意地を張つてゐるような微笑ましい光景を連想させる。例によつて黒夜は北斗の膝の上に座つてゐるのだから尚更だ。

そんな光景を目にした麦野は先ほどとは打って変わり悪鬼もかくや  
といつ表情を浮かべる。

「ほぐとおおおおおおーー！ テメエ、この私を一ヶ月以上も放置しとい  
てなにこんなチビとこちやついてやがんだあーー？」

「…沈利じゃないか。放置もなにもオレは連絡とれなくなつたしフ  
られたと思つたんだけどな」

「あれは仕事でついうつかりケータイを壊したからで…あの後買  
なおしたケータイで暗記してた番号にかけてももう使われてないつ  
てのはビリコリ」とだ！？」

「ああ、オレもケータイ壊しちゃつてねー」

もちろんタイミング良くケータイが壊れたなど嘘である。北斗は彼  
女一人につき一台のケータイを使っており、連絡がつかなくなる、  
別れた、飽きたなどの理由があるとすぐに解約している。今回のこ  
とは麦野には不幸なすれ違いと言えるだろ？。もっとも北斗はちつ  
とも気にしていなかつたが。

「なあ北斗、コイツ誰だ？」

「麦野、こつらがビリのビコツな訳よ？」

「じゃあお互いに自己紹介を行いうか。麦野もひとまず落ち着いて

「ちつ後で詳しく述べてもらつからな……私は麦野沈利、第四位よ」

「フレンダ＝セイブ＝ルンよ」

「絹旗最愛です……なんでアンタがここにいるんですか」

「……滝壺理石……」

「オレは第六位の御門北斗、沈利が世話になつてゐるようだね」

「黒夜海鳥。……それはこいつのセリフだぜ絹旗ちやんよお」

自己紹介のはずがなぜか一名の雰囲気が険悪だ。片方は後ろから北斗に抱きかかえられているので口なしではあるが。

「……『成績』もろくに出せなかつた劣等性が、見ない間にずいぶんと超大きな口を叩くようになりましたね。第六位の威を借りて調子乗つてゐるんじゃないですか?」

「あれえ?『暗闇の五円計画』の事言つてゐる?」

「ヤニヤと笑いながら黒夜は北斗の膝から降り、絹旗に相対する。

「あんな研究者連中の都合のいい犬だった優等生の綿旗ちゃんに比べたら劣等性だつたかもしれないねえ。それに自分には守ってくれる男がないからつてひがんでんのかあ？」

「超殺すッ！」

「図星だからつて逆ギレしてンじゃねェよオッ！」

最早二人の雰囲気は一触即発だ。昼間から大能力者同士のバトルが展開されようとしているこの店が哀れでならない。先ほどのウェイタレスなど今にも氣絶しそうである。

「フレンダちゃんに理屈ぢやんだつけよかつたらアドレス交換しない？」

「…いいよ。よろしくね、みかど」

「そんなことより結局あの一人は放置でいい訳！？」

「放つておきなさい。流石に場所をわきまえる程度の分別はあるでしょう」

「ヤバくなつたらオレが止めるさ。沈利も交換しなおそりが」

「やうひね、今度は壊さないでよ？」

「ああ！？私のサバ缶が真つ一つに…結局私に被害が来る訳よ」

「大丈夫、そんなふれんだを私は応援してる」

「蜜素コンビの一人とは違つてフレンダを除く三人は實にマイペースであった。」

## 第三話（後書き）

なんとか第三話を書きあげることができました！

数あるとある中でもむぎのんが元カノなんて小説を書いた人は他にいないんじゃないでしょ？

ちなみにこのままむぎのんとの修羅場が発生するのかそれとも元を戻すのかはまだ決めていません。

ただはつきり言つておくとするとこの作品のメインヒロインは黒夜です！

作者の趣味です。

垣根エ  
：

## 第四話（前書き）

あとがきにアンケートがありますので、「協力ください。」

「すまない、連れが迷惑をかけたな」

「悪いのは私じゃない」「イイシだ

「責任転嫁だなんて超無様ですね」

「ヤンのかアツー?」

「超ボコボコにしてあげますよー」

「はいはいで吸收ー」

「「「」」」

「」」」は第三学区にある高層ビルの一角、アイテムの隠れ家の一つであるVIP用のサロノ。

年間契約の貸し切り個室で、『一ツ星』以上の会員証ランクがなければ借りる資格すら『えられない』といつ、軽く3LDKを超える広さを持つ最高級な感じの部屋である。

ちなみに北斗も一部屋借りており、主に異性関係に使用されている。一体いくつ部屋を借りているのか問いたい。

先ほどまでファミレスにいた6人だが、黒夜と絹旗の乱闘のせいで店に深刻な被害が出ており、警備員が駆けつけてくる前に逃げ出してきたのだった。

「結局なんでコイツらまでここにいる訳よ？しかもちびつ二人を膝の上に口リハーレムつくれてるし」

「私が連れてきたのよ。詳しい事情も聞きたかったしね。アンタらも話が聞けてちょうだいこじじゃない」

「コイツらを抱えてるのはまた暴れられても困るからオレの能力で抑えるためだよ。まあわざわざ密着する必要はないんだが…役得つてことで」

「離せこの口リコン…力が超抜けていく…？」

「力を入れる度に吸いとつてるからな。ほら暴れるから下着が丸見えだぞ？」

「超死ねえええーー！」

「…海鳥とは違つてオマエは可愛らしいパンツ穿いてんだな。うん、これはこれで悪くない」

「つうつ超汚されました…」

力が入らないのかもぞもぞと暴れたせいか、絹旗のワンピースの裾はもともとギリギリのラインだったこともあって捲れ上がつており

下着が丸見えになつていてる。それをヤクザ風の男が堂々と見て、あまつさえ感想まで言つていてるのだから変態以外のなにものにも見えない。絹旗にいたつては顔を真つ赤にさせて体を震わせている。

「まつたくな」をやつて「」いるのよ

「絹旗がいじられ役だなんて珍しい訳」

「…そんなみかどは応援できぬかも」

「（北斗は子供パンツも好きなのか…今度穿いてみよう）」

平和である。

しばらく北斗の腕の中でもがいていた縄旗だったが、ようやく無駄を悟ったのか抵抗をやめぐつたりとしている。相変わらず下着は見えたままだ。

「ようやく静かになつたな。それで沈利は何を聞きたいんだ？」

「まずはそのガキとの関係を聞かしてもらおうかしら？」

「コイツ グループ海鳥はウチの構成員だ。少し面倒見てやつたら懐かれてな？・ようするに沈利、お前と同じようなもんだよ」

「麦野の面倒も御門が見た訳？」

「ああ、沈利と出合つたのはかなり前でな。あの頃はまだお嬢様然としてて可愛らしかつたぞ」

「麦野が可愛らしいお嬢様！？今では考えられない訳よ

「ケンカ売つてんのかフレンダアアアアア…あんまり舐めた口きくと真つ一つにすんぞ！？」

「死亡」フラグ！？』

「ならフレーヌンダだな。これからはンダと呼ぶ」』と云ひよつ

「なんで下半分！？確かに白艶の美脚だけど！？」

「やつぱりフレンダにはいじられ役が超似合つてますね」

「……お、『トイツ』にじられてるのに目輝かせてんぞ？」

「ドムなんだろ。海鳥はこんな風にはなるなよ？」

「大丈夫、そんなふれんだでも私は応援してる」

「私はノーマルな訳よーつて落ち着いて麦野ー！？」

「逃げんなよフレンダアアアアアー！ー！ー！」

照れ隠しか原子崩しを放つ麦野とそれを必死に避けるフレンダ。そしてそれを面白そうに眺める4人。しかも滝壺はさり気無く北斗の後ろに避難している。

混沌とした光景だった。

## 第四話（後書き）

お待たせしました第四話です！

しかし人数が多いと書くのが大変ですね。  
とくに滝壺なんか積極的に会話に参加する方じやないので影が薄くなってしまつて…  
作者の力不足を嘆くばかりです。

さて今回はアンケートを取りたいと思います！

未だ継続中のアイテム攻略ルートですがどのキャラをメインに書いてほしいですか？

全員書くとなると日常パートばかりでストーリーを楽しみにしていらっしゃる方に不評なのではと思いまして…；

- 1・日常パートのなにが悪い！全員しつかり書け！
- 2・すでに攻略済み（？）な麦野
- 3・口リコン上等！子供パンツな最愛ちゃん
- 4・ドM疑惑浮上中のフレンダ
- 5・並みに影の薄い滝壺
- 6・アイテムなんか放つておいて他のキャラにしろ！

ちなみに6番を選ばれるとほとんど描画も無しに攻略されたり登場しなくなつたりしてしまいますので「注意ください」。

では活動報告、または感想にアンケートの記入をお願い致します。

次回は特別番外編～北斗と海鳥のお正月～です。  
お楽しみに！

## 特別番外編「一人のお正月」（前書き）

明けましておめでとうございます！

今年も「とある茨の禁書田録」をよろしくお願い致します！

## 特別番外編「一人のお正月」

「〇一一年一月一日元日。

新年最初の日、科学偏向の街である学園都市といえどもこの日ばかりは学生、研究員の区別なくお正月気分を味わっている。そんな学園都市の第七学区にあるマンション、最上階一フロアを丸ごと占める超高級な部屋。御門北斗の住まいであるそこに御門北斗と黒夜海鳥の一人はいた。

「明けましておめでとう、海鳥」

「明けましておめでとう、北斗」

「しかし私たち暗部連中にとって明けましても何もないだろ?」

「そんなこと言つてもオレが用意した振袖着てくれたんだな。とでも似合つてゐるぞ」

「ちがう違えよつて。これはその……着る服がなくて仕方なくだな……」

「あとでアレイスターに『滞空回線』のデータ貰つとかなきやな

「ヤメ口オオオオオ……」

黒夜が着ているのは黒地に白い花が散りばめられ金糸で刺繡のされた華やかな振袖だ。口では仕方なく着たようなことを言っていたがしつかり髪を結つてあるあたり抜かりない。頬を染めて照れていた時など破壊力抜群である。ちなみに北斗は茨が巻きついている様が描かれた羽織袴を着ている。…出入りもあるのだろうか？

「ともかくお雑煮でも食べようか。あとはお餅を入れるだけだからすぐできるで」

「私はお餅一個なー」

「はーよ、ほつと待つてくれ

「「いただきます」「

「相変わらず北斗が作る飯は美味しいな

「まあそれなりにはな。ほら、あーん

「うふ…あ、あーん

「やつぱつオーマイガーディな

「何言ひてやがる……つてもうここから一満面の笑みで箸近づけんな  
……」

正円早々一人でこちやついている。こつも通りの光景と言えばそれまでだが、ただのバカツブルである。

「さて、飯も食つたし。……はい、お年玉」

「わーい……つて分厚い！？」

「とつあえず百万ほど入れといた」

「馬鹿だろ……私は別に金を恵んでおもひつぱり困つてないぞ」

「いいんだよ。じつこつのは氣分の問題なんだから。オレだつてアレイスターからもひつたで」

「統括理事長からー？」

「毎年もひつてるな。レベル5は全員もひつてるはずだぞ」

「キヤウじやねえだる……」

似合わない所の話ではない。実際もひつた当初は震の可能性を考えたほどである。

「…………… パーリーでも置かへるかア」

「これでよつやくまともった現金が…………つて借金明細！？……でもちよつと減つてゐる……」

—毎年欠かさずなんて統括理事長ってのも律義よねー

「新作の服でも買おつかしら」

「お年玉だ！」これも一年いい子にしてたからね



「海鳥ーー！甘酒飲むか？きな粉餅もあるぞ？」

「初詣行きたいからってなんで学園都市の外に…」

「学園都市の神社なんて危除けとか言つて除菌されるだけじゃないか。風情がない」

今一人がいるのは学園都市外にある神社。初詣に行こうと北斗が黒夜を引っ張つてきたのだ。

「おみくじも引いておこづけ」

「はいはい、…私は中吉だな。健康に気をつけるだとか。サイボーグ化してる私に言われてもなあ」

「一応今度メンテナンス行つとけばいいんじゃないかな？」

「それより北斗はどうだった？」

「オレは小吉だが…………見なかったことにしておけ!」

「恋愛運…今年は女難の年。包丁や背後で気をつけまじょ!」

「…私は刺さないぞ?」

「疑問形かよ! オマエのことは信頼しているから心配なことしてないで!」

「」

「そ、そつか…私も信頼している」

「なんか言つたか?」

「なんでもない! それよりお參つてしまつて早く行こう!」

「おー、引っ張るなって」

「北斗は何を願つたんだ？」

「ん？ 刺激的な毎日が送れるようになってのと可愛い女の子と知り合えるよう、つてな」

「また浮気か！？私を放つておいておくなんて許さないからな！」

「オレがオマエを放つておくわけないじゃないか。それよりオマエは何を願つたんだ?」

「それは… つて話をそらすな！ 大体北斗がいない日の朝はすこく寂しいんだからな！ それなのにお前は女の匂いを残しながら帰つてくるし！ ！」

「はっはっは、自爆してるぞ？ 海鳥は甘えたがりなんだから」「

いつも通りな二人。黑夜は自爆して色々口が滑ったようだがここが  
魅力なのかもしない。  
なにはともあれ今年もいい年になりそうである。

「つまでも『海鳥』『北斗』と一緒に過ぐるかすがりうら

## 特別番外編「一人のお正月」（後書き）

今回ばかりは甘々な内容になりました。  
ですが一人の願いも書いて作者としては満足です。

ただいま継続中のアンケートですが予想以上に集まりが悪く涙目です。  
無理にとは言いませんが協力してもらえたると幸いです。

## 第五話（前書き）

この主人公はホストのように甘い言葉を吐いて女を落とすのが基本ですが、

全員攻略鬼畜ルートを望んだ方がいたので少し強引な方法も取り入  
れていきたいと思います。

また、参考になるのでアンケートは継続します。

アンケートだけではなくこのキャラを絡ませてほしいなどありまし  
たら感想の方へ。

深夜の学園都市。完全下校時刻をとつて過ぎ、出歩くものがいなくなつた街を黒塗りのワンボックスが走り抜けていく。

「それにしてもなんで『アイテム』の仕事にアンタが超ついてくるんですか。しかもアイツを滝壺さんに預けて。捨てられた子犬みたいに目してましたよ」

「最近仕事が少なくてな、ちょっと暴れたかったんだよ。オレの能力は便利だが面倒もあるのさ。それと海鳥を置いてきたのはアイツに知り合いを増やして欲しいからだ。初対面で掴みきれてないが滝壺ならいい関係を築いてくれるだろ?」

「私たちみたいな暗部にはその優しさは命取りですよ。もつとも実験の時に研究者連中を皆殺しにしたアイツにとつては超余計なお世話なんじゃないですか?」

「命取り、ね。わかってるぞ、所詮は偽善に過ぎない。もし邪魔になるようなら躊躇いなく切り捨てる。まあアイツはオレが死んだら仇取つてから自分も死ぬなんて言つてるけどよ」

「あの黒夜海鳥が?超信じられませんね」

「そう思つのも無理はない。だけビアイツは不安定なんだよ。実験で『攻撃性』を植えつけられたせいか本来の黒夜海鳥の人格に乖離がおきてしまつてゐる。『防護性』のオマエになら多少はわかるんじゃないのか？」

「それは…」

「能力使用時に口調が変わつてしまふのがいい例だ。本人が意図せずとも思考が攻撃的になつてしまふ。これでも最近は安定した方なんだぜ？なんせオレが引き取つた当初なんか他人に近寄ろうともしないで部屋の隅で膝を抱えてた。そのくせオレが視界に入つてないと不安になるのか風呂やトイレにまで入つてきやがる」

「…想像できませんね。私が見た彼女は他人を嘲笑つているような超嫌なやつでしたし」

「自分の内心を他人に見せたくないなかつたんだろうさ。不器用なんだ、どうしようもないくらいな。だから絹旗、オマエもたまにでいいからアイツと世間話でもしてやつてくれよ。眞実同類と言えるのはオマエくらいなもんなんだから」

「…努力はしてみます。笑つて話す自身は超ありませんけど」

絹旗自身は『防護性』という比較的影響の少ない部分を植えつけられたため黒夜の苦悩を完全に理解できたとは言えない。しかしそれでも思うところがあつたのか北斗の頼みに対し神妙に頷いた。

「なんならオマハもひいてくるか？幸いにして部屋は余ってるしな」

「生憎ですけどロココンと住むのは超遠慮します」

「遠慮すんなよ、手続きとか面倒なことはやつてこいやるからね」

「ですから私は遠慮するわけじゃから超面倒なことはないですかー」

「おっとそんなことよつ田的に着いたみたいだぞ？」

先ほどの暗い雰囲気がなかつたかのように騒いでいた一人だったが、どうやら車が目的地に到着したようである。場所は廃棄された区画にある路地裏だ。一人は車から降り軽くあたりを見回している。

「今回の仕事は」<sup>スキルアウト</sup>を根城にしている武装無能力集団の壊滅です。逃げ出す奴は放つておこてもいいらしいので超楽な仕事ですね」

「なら派手に一発かました後集まつてきた輩を叩くつて感じかな」

「それが無難でしょうね」

「じゃあ絹旗はオレの後ろにでもいてくれ」

そう言つて北斗が取りだしたのは缶ジューク程度の大きさの物体、スタングレネードだ。それを30メートル程奥に投げ、着弾と同時に爆音と閃光が路地裏を駆け抜ける。相当な衝撃のはずだが一人は涼しい顔をしている。

「爆音が私たちまで届いていない？ いえ、能力で吸収したんですか」

「正解。わざわざあんなうるさい音聞くことないだろ？」

「どんな仕組みかは知りませんが超便利な能力ですね」

「もちろんアメリットもあるがな。……つと集まってきたようだぜ？」

今の爆音と閃光を聞きつけたのかスキルアウト達がワラワラと集まつてくる。それを確認した絹旗は近くに乗り捨ててあつたバイクを軽々と持ち上げると前方の集団に向かつて投げつけ、自身もそれを追うように突っ込んでいく。北斗は投げつけられたバイクが衝突する同時に一瞬でその場から消え去り、次の瞬間には頭部を失った死体が次々と生産されていく。一瞬前まで北斗がいた場所のコンクリートが陥没していることから高速で踏み込み頭を潰したのだろうが最早人間に出来る限界の速度を大きく超えており、なおかつその身には返り血など一切ついていなかつた。

それ以降も一人は縦横無尽に暴れまわり、スキルアウト達は碌に抵抗もできぬまま殺されていく。悪夢はまだまだ始まつたばかりである。

再び深夜の街を走るワンボックスカー。その中に先ほどの虐殺を起こなった二人はいた。

「あっけなかつたなー」

「所詮は無能力者ですからあんなものでしょ?。それより早く帰つて超寝たいです」

「そうだな。海鳥には先に帰つてお休みメールしといたしオレも風呂入つてやつやと寝るかね」

「わしこえれば御門はビビリ住んでるんですか？」

「普段はいくつか所有しているヤーフハウスを渡り歩いてるからあまり使ってないが第七学区にある高級マンションだよ。窓のないビルの近くに建つてゐやつ

「……学生の住む場所じゃ超ないですわ」

「いいんだよ金なら有り余つてるんだし

「麦野もさつでしたけどレベル5つていうのは金銭感覚が超おかしいです」

ちなみに北斗が住んでるマンションは軽く億を超えてる。いくら報酬の高い暗部の仕事といえども到底無理なはずなのだが……不思議である。

「どうやら御門のマンションについたよつですね。……では私はこれで失礼しますね」

「なに言つてるんだ? うちに住むって言つただろ?」

「はい? あれは超遠慮すると……」

「もつ手続きも済まして緋旗の荷物も運び入れをせてあるが

「…………はあ! こいつの間にか……ってそれよりなんで私の荷物が! ?」

「どこに住んでるか調べさせて運ばせたんだよ。言つとくがもう才マエの部屋は解約しちまつたぞ」

「だからうちに住むんだって。ほら行くぞ」

どうやら絹旗は北斗の家に住むことに無理やり決まったようである。いつの間にそんなことをしていったのかは不明だが恐ろしく仕事が早い。この男は本当にロリハーレムでも築きたいのだろうか？他のアイテムメンバーへの説明が大変そうだ。特に麦野の。

「帰つたぞー！」

「おかげり北斗！なんか荷物が運ばれてきたけど一体……ってなん  
でソイツを抱きかかえてんだ？」

「今日から「コイツも」ここに住むことになつたから」

「なんだそれー…『ルーラン』だねー…」

「私にだつて超わかりませんよ……いきなり連れてこられたんですから……」

「ああ……まあ北斗だからな。…………諦めろ」

「超不幸です……」

こうして北斗の家に住人が一人増えたのであった。

オマケ

「海鳥一風呂に入るやつー」

「今準備するから待つてくれ」

「一緒にお風呂とか超子供ですね」

「何言つてんだ。オマエも一緒にに入るんだよ

「え？ めつ脱がさないでーーーーー？」

「うー、もう超お嫁にいけません

「ならオレが貰つてしまお。オマエも湯船につかれ

「わざわざスペース開けてやつるんだから早く入れよな

「わからましたよ（……超大きいです……）」

「（……見すぎだらう……）」「

オリ

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第六話（前書き）

なんとかパソコン復旧完了！

前回のお風呂のせいかPVがすごいことに…？

お風呂のシーンが詳しく見たいとこの方が多いればノクターンで  
書くかもしれません（笑）

「……超知らない天井です。……………そういえばここは御門の部屋でしたね」

何やら某汎用人型決戦兵器に乗っている少年のようなことを口走ったのは絹旗最愛。昨夜から御門北斗の部屋に（北斗によつて無理やり）住むことになつた少女だ。なお、ここは絹旗に『えられた部屋であり1-2畳程の広さがある。

「まつたぐ。お風呂だけでも超一杯一杯なのに一緒に寝よつだなんて無理に決まつてます」

一緒にお風呂は避けられなかつたがどうやら一緒に就寝は避けられたようである。

「けど誰かと一緒に入浴するなんて研究所の洗浄以外では超初めてでしたね……案外悪くないかもしれません」

昨夜は恥ずかしさやらなんやらでパニック状態に陥つていたが冷静

になればどこか感じ入るところがあつたようである。もつともパックの一因には衝撃的なものを見てしまつたせいもあるだろうが。

「御門も暗部にいる割には悪い人間でもないようですし……兄がいたらあんな感じだつたんでしょうか。：一緒に寝るくらいならしてあげてもよかつたかもしませんね」

「なら今夜からは一緒に寝るか、妹よ」

ぎぎぎつと壊れたロボットのように振り向いた絹旗の眼に映つたのは部屋の扉にもたれかかった北斗の姿。さすがに自宅ではスース姿ではなくスウェットを着ている。

「…いつから聞いてたんですか？」

「超知らない天井です、からだな。新しい生活を行つてもらえたようでなによりだ」

「起きた時には確かに部屋に誰もいなかつたのに…？」

「聴力を強化して部屋の外で聞いてた。能力のちょっととした応用だ」

「能力の超無駄遣い！？」

「別にいいだろ。それより朝食にするから顔洗つてこい、寝癖がついてるぞ」

「超洗つてきまーー！」

「ああ、言こ忘れていた。おせよつ最愛」

「……おせよつこます（私の恋）」

名前で呼び捨てにされた絹旗だが不思議と嫌な感じはしなかつた。そのことに内心首を傾げながらも絹旗は寝癖をなおすために洗面所に走つて行つた。

「……おせよつあつあつでした」「」

「なかなか美味しかったです。それにしてもアナタはいつも御門の膝の上で食べているんですか？やっぱり超子供ですね」

「なんだあ？絹旗ちゃんつてば羨ましいのかにゃーん？」

「べ、別に羨ましくなんか超ありませんからー。」

「その反応は怪しいねえ。言つとくがここは私の定位置だからな」

「だから違いますって！」

黒夜をからかおうとした絹旗だったが逆に黒夜に「ヤーヤ」とした顔でからかわれ顔を真っ赤にしていた。本当に羨ましかったのだろうか。

「二人とも仲良くしろよ。それで絹旗は今日なんか予定でもあるのか？」

「今日は仕事も無いんで映画でも超見に行くつもりでしたけど……それがなにか？」

「いや、オレ達も今日は暇でな。差し支えなければついて行つてもいいか？」

「別にいいですけど私が見るのはC級映画なのでアナタには超つまらないと思いますが」

「暇つぶしなんだから構わないさ」

「私は北斗が行くならついていく」

「それに意外と面白いかもしないしな」

「そうですねーそもそもC級映画といつのは.....」

なにやらC級映画について語りだした絹旗、それを聞く二人は少し  
引き気味である。ともかく三人は映画を見に行くことになった。



現在三人がいるのは第七学区にあるとある映画館。上映開始まで間もないというのに映画館の中には北斗達三人しかいない。

「…ずいぶんと空いてるんだな」

「いつも超こじんな感じです」

「なあ北斗、ポップコーン買つていいか?」

「買つてくるか。最愛も食べるか?」

「じゃあ塩味で。キャラメルなんてのは超邪道です」

「オレはキャラメル好きだけどなー」

ポップコーンを買つてきたところでどうぞ映画が始まつた。どうやら日本を舞台にした恋愛モノらしい。しかし出演者は全員外人であり、無駄に多国籍である。

（十分経過）

「（超流石です。やはつし級せいけつでなくして）」

「…………（なんでホラーでもないのにヒロインがいきなり幽靈と戦つてるんだ？しかも巫女服を着ときながりロザリオを連射する銃とか両サイドにケンカ売りすぎだろ）」

「ふみゅ…………北斗…………ダメ…………」

「（何の夢見てるんだ）」

～三〇分経過～

「…………（恋愛って幽靈回士のだったのか！？落ち武者の靈とか説明されたが……何故に落ち武者へアーの板金鎧）」

「…………北斗お…………バッジの上にじやなきや嫌…………」

「（映画より寝言の方が超気になります）」

（一時間経過）

「…………（幽靈が巨大化した！？しかも戦闘機とバトルしている  
し…………幽靈合体ってなに！？）」

「……自分で動けだなんて……」

「（やはり一人は超そういう関係なんですかね）」

（映画終了）

「突っ込み所が満載だつたな……」

「……よく寝た」

「駄作でしたね（寝言が気になつて映画ビリビリじゃ超ありませんでした……私もあんなことられてしまつんでしょうか）」

結局まともに映画を見ていたのは北斗だけだったようだ。黑夜はまだ眠そうにしており、絹旗に至つてはなにやら妄想でもしていたのか頬がほんのり紅潮している。

「じゃあ夕飯の材料でも買って帰るうか。何が食べたい?」

「北斗が作るものなら何でもいい」

「食べられるものなら超何でもいいです」

「ならオムライスでも作ろうかね」

一人の手を引きながら歩いていく北斗。本人は引率でもしている気分なのだろうが傍から見れば誘拐現場にしか見えなかつた。



夕飯も食べ終わり三人はそれぞれ思い思いに過ごしていた。なお、オムライスにはケチャップでそれぞれの名前が器用に書いてあつたことを追記しておく。

「さて、オレはちょっとやる」とあるから少し外すけど二人ともケンカするなよ?」

「それは緋旗ちゃん次第だな」

「しませんよ」

「ならいいんだけどな」

そう言つと北斗はケータイを片手に血室へと入つて行つた。この部屋は北斗以外は例え黑夜であつとも入ることを許されていない完全なプライベートルームである。そして残された二人はといふと…

「…………」

ひたすらに無言だった。今まで会話が成立していたのは北斗が間に

入つて緩衝材になつていたからであり、むしろ一人だけでは険悪な雰囲気すら漂つていた。

「ひとつ聞きたいんですが……アナタと御門はその……超そういう関係なんですか？」

「あん？ ああやることはやつてんな。だけど恋人つて関係じゃないぞ」

「恋人じゃない？」

「私は北斗の所有物だ。北斗が殺せと言えば殺すし死ねと言われれば死ぬ」

「所有物……御門はそんなこと超望んでません！ 私たちを会わせたのだってアナタに自分以外の人との関わりを持つてもらおうと……」

絹旗の言葉を遮つて黑夜が雰囲気をがらりと変えて喋りだす。

「お前に北斗の何がわかる。北斗がそう言うなら他人とも関わるさ。だけどそんなのは北斗の一面に過ぎない。北斗は私の全てだ、このどす黒い真っ黒な『闇』の中でなお暗くて深い唯一の存在。私を引きこんで離さない深淵の君、茨の王。私が吸い殺されて枯れ落ちるまでこの命は北斗のためだけに在る」

「…………」

「それに勘違いしてるよつだから言つておくが北斗も暗部の人間だぞ？しかも『中核』を成すグループのリーダーだ。そんなのに優しいだけの男がなれるわけないだろ。そもそも北斗は私達すら『ヒート』としてなんか見ていない、物だよ。自分の所有物を愛でているに過ぎない」

「……そんな……」

「私はそんな愛でも構わない。物として見ていようがその他大勢じやない私だけを見てくれている。それに女としても愛してくれてるんだ文句はないさ」

「…………私は…………」

「お前も北斗に惹かれてるんだろう？おいおい何でわかつたかなんて聞くなよ。私とお前は似てている。あのくそったれな実験の後どう過ごしてたかなんて手に取るようになるとわかる。抗えないよなあ？例え物としても絹旗最愛を見ているんだから。この闇の中でそんな奴は北斗くらいなもんだ」

「…………確かに私が御門に惹かれてるのは認めます。それを知った貴女は私をどうするんですか？邪魔者として超殺しますか？」

「いいや？私は別に北斗に女が増えようと気にはしないわ。ただ北斗に害を成すよつなら排除する」

「超肝に銘じておきますよ」

「まあそんな貧相な体じや北斗を満足させられないだろ？がな」

「あなただけて私と超変わらないじゃないですか！！」

「私はテクニツクがあるからいいんだよ」

「それくらいちょっと練習すれば超余裕です！」

「ビビだかねえ。言つてへけど北斗は他にも女がいるからな?」

「…………え？…………それでも他の女には負けません！－！」

「まあ頑張れよ（何が惹かれてるだ。完全に惚れてるだろ）」

「まずは御門を超誘惑するためにせりヒワンペースの丈をギリギリのラインにしなければ！」

「……もう裸も見られてんだろ？」



「ああ、わかつていいるとも。もつ近くまで来ているんだろう? ならアンタのためであらうともやつてやるが、そもそもアンタがいなけ北斗の自室。入るために静脈認証とパスワードが必要であり、核ショルター並みの強度を誇る部屋でだ。もちろんこと盗撮や盗聴などの防諜は完璧である。そこで北斗は携帯電話で誰かと話をしていた。

ればオレは生きていけないんだから。それに『オリジナル』の事が知られたらオレを殺そうとするヤツが大量に現れる。面倒はごめんだからな』

しばらく電話相手と話していた北斗だが用件は済んだのか電話を切り、天井を見上げる。その眼はここではないどこかを見ているようだ。

「時は満ち、物語がの開始を告げる鐘が鳴り響く。そして『プラン』は進んでいく、……だがオレには関係ない。オレはこの世界で生きていくだけだ』

その呟きは誰にも聞かれることなく闇の中に溶けていった。

～オマケ～

「そろそろ寝るかね。最愛、一緒に寝るか？」

「そ、そんないきなりだなんて超心の準備が…」

「残念なお知らせだが私も一緒だよ。絹旗ちゃんは純情だねー」

「なつ！？初めてが三人なんて…」

「何やつてんだ？いいから早く寝るぞ」

「結局ただ寝るだけなんですね…」

「ん？なら抱きしめて寝てやるよ

「えー？超待つてください…」

「なら私は北斗の背中で我慢するか

「…………（い、息が耳に…？それに手が胸に当たって…変な気分に…）」

「…………（北斗の背中温かいな…）」

「(1)の体勢寝辛いな……抱きしめなければよかつたか」

「オワリ~

お待たせしました!第六話です!

本当は今日のお昼頃にはアップできる予定だったんですがパソコンのデータが破損しまして……消えたレポートビツトウ……

それはともかく今回は見所が満載ですね!

最後の電話相手とは一体!?

まあバレバレですね(笑)

それでは感想、(1)意見、誤字報告などお待ちしております。

## 番外編～黑夜海鳥の過去～（前書き）

毎日更新できませんでした。。。。

前話で黑夜の狂信的な面が見えてきたのでそれに至る過程を書いた  
いと思います。

もしかしたら気分が悪くなるかもしれませんのでご注意ください。

私が覚えている最初の記憶は優しい両親の姿などではなく冷たい目で私を見下ろす白衣を着た男たちの姿だった。よく覚えてないが体中に機械を取りつけられていて苦しくて寒くて泣いていた気がする。

次に覚えているのは薄暗いトイレだけがある部屋。あの時はなんとも思わなかつたが今考えると牢屋というのが一番近かつたかもしれない。そこには私と同じ5・6歳くらいの子から9・10歳くらいまでの子供が詰め込まれていた。みんな生氣のないがらんどうの目をしていて、私はそれがとても怖く見えていつも部屋の隅で蹲つていた。

毎日毎日実験室と部屋の往復。幼い私は何をしているのか理解できていなかつたが喜んでいる大人達を見ていると私も嬉しかつた。あんな笑いもしない気持ち悪い人たちと一緒にいるよりははるかにマシだつた。大人達は私達とは違つてお互いの事を番号以外で呼んでいたのがその時の私は不思議でならなかつた。

あの後聞いたところによると普通は名前というものを持つてゐるらしい。私達は置き去りで実験材料だから名前は必要ないそうだ。な

チャイルドエラー

んだかずるいと思ったのを覚えている。なんだか部屋にいる子供が減っているような気がしたが私は彼らが嫌いだつたのでどうでもいいことだった。

ある日私に能力というものが使えるようになった。空気中の窒素を手のひらに集めて操れるらしい。能力の使用に必要なことは変な機械で頭に直接埋め込まれたので使用にはなんの問題も無かつた。能力を使っての実験ばかりだからちょっと頭が痛かつたけど頑張ると飴を貰えたから一生懸命やつた。糖分を効率よくエネルギーに転換できるとか言ってたけどあんなに甘くて美味しいものは食べたことなかつたから話も聞かずに夢中で食べた。超超言つてる女の子の方が一杯もらつてるのが羨ましかつた。

そんな日々が何年か続いていたけどある日研究所に真っ白な子供がいるのを見かけた。私より年上だつたけど真っ赤な目もあつて研究員が話してくれたウサギの特徴にそつくりだつた。アグセラレータ一方通行とか呼ばれてたし可愛いのに目つきが悪かつたから残念な人だと思つた。目が光を失つてなかつたから気になつてたけど部屋には来なかつた。年上の女の子が部屋からいなくなつてたけどどこに行つたんだろう?

それからしばらくしたら研究員が実験の内容が変わると言つてきた。なんでもあの白い人の演算パターンを使って能力の効率化を図るらしい。これでさらに能力を使えるようになれるなら嬉しい。また飴もらえるかな?

この前の実験の後私の能力が少し変わった。『窒素爆槍』<sup>ボンバーランス</sup>といつて手のひらから窒素でできた槍を生み出すことができるようになつたらしい。…これでもつと壊せんなア。実験からしばらく経つがなうでだか手当たり次第に壊したくなる。子供達を見れば殺したくなるし研究員を見れば引き裂いてやりたくてしかたねエ。つたく鬱陶しいンだよなア、殺してやろオカ？

最近物騒なことが頭に浮かんでくる。私はこんなこと考えたりしない。誰も殺したくなんてない。でも私の気持ちなんか関係なく思考が攻撃的なもので埋め尽くされる。……怖いよ、誰か助けて助けてくれねエなら殺しちまうぞオオ！！

殺させろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「まつたく、研究員と連絡が取れないから様子を見に行けと言われて来てみれば、いるのは狂乱した子供だけとはな」

その男はどこからか燃え広がった炎の中を悠然と歩いて私の前に現れた。高校生くらいだろうか、ダークスーツを身に纏い、無造作に伸ばした長髪をたなびかせて。何かしらの能力を使っているのか燃え盛る炎を自身を中心にして渦巻かさせていた。

「オマエがこれをやつたのか？愉快に暴れているじゃないか

男はその見るだけで吸い殺されそうな奈落の如き光を湛える瞳を私に向けながら話しかけてくる。見るだけで、いやその場にいるだけで飲み込まれてしまいそうな気がした私はただ目の前の怖いものを消したくてがむしらに能力の槍を男に叩き込んだ。

「消えろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「いくら狂乱しているとはいえその歳でオレに立ち向かうとは見所があるな。オマエ、名は？」

私の全力だつたはずなのに男は何事もなかつたかのように歩み寄ってくる。それが怖くて恐ろしくて私はただ震えながら見ているしかなかつた。

「……………20.0165」

「名前がないのか。ならばこれからは黒夜海鳥と名乗れ。この黒い『闇』の中を渡る鳥のよう」。『』でオレに出会つたことは僥倖だ。オレの物になることを許す」

「あつ…………」

私の意識はそこで途絶えている。最後に見えたのは男の瞳に映る深淵と黒い茨だつた。今にして思えばこの時から私は彼に引きつけられていたのかもしねれない。

……目が覚めたのは白いシーツが敷いてあるふかふかしたベッドの上だった。研究所の部屋とは違つて明るくて清潔でまるで現実感がなかつた。私にはもつたいたいくらいだ。

「目が覚めたのかい？ 手荒な真似をしてすまなかつた。どこか痛いところはないかい？」

そつ言つてあの怖い人が部屋の中に入つてきた。研究所のときは打つて変わつて優しく話かけてきたが私は怖くて布団を被つて震えていた。彼はそんな私にお構いなしにいろんなことを説明してくれ

た。彼の名前は御門北斗といいうらしい。あれでも14歳だというんだから絶対おかしい。これから私は彼と一緒に住んで暗部ということになり働くことになるらしい。

あれから彼と一緒に住むことになつたわけだがやつぱり私は怖くて彼がいるときは部屋の隅で震えていた。彼はそんな私の姿を見て笑つていたけれども。ある日彼は私を初めて仕事に連れて行った。人を殺すらしい。…………お前らみんな殺してやるよオッ！

能力を使うといつも誰かを殺したくて仕方がなくなる。私はそれが怖くて布団の中で泣いていた。すると彼が部屋に入ってきて何も言わずに私を抱きしめてくれた。いつもは怖くてまともに見ることもできなかつたけどこの時はすごく安心して気付いたら眠つてしまつていた。起きた時も彼が抱きしめてくれていてとても嬉しかつた。ありがとう北斗。

それから私は北斗と離れたくなくて毎日一緒に寝たりお風呂に入つたり、時々仕事もしていただけどとても幸せな時間だつたと思う。そんな日々を一年以上続けて、やっぱりあの研究所での光景は混乱していくからで北斗は優しい人だつたんだと思っていた。けどやつぱり北斗は優しい人なんかじやなかつた。

「さあ、もう仕事で人を殺すのにも慣れてきたから今日は何の罪もない一般人をこの包丁で殺してみようか」

北斗が彼女だつていう女子高生を家に連れてきた。とてもいい人で私のことも可愛がつてくれて手料理まで食べさせてくれた。なのに北斗は私にそんなことを言つてきたのだ。彼女さんは冗談だとでも思つてゐるのか笑つている。私も冗談だと思つたかった。

「じつかりと心臓を狙つんだよ」

私の手に包丁を持たせて笑顔で笑いかけてくる。流石に彼女さんも何かがおかしいことに気付いたのだろう、顔が青ざめている。

「で、でもこの人は北斗の彼女なんでしょう…？」

「もう飽きたからいらないんだよ。それに海鳥の相手にぴったりだと思つてね」

彼女さんは逃げようとしたが北斗に両腕を拘束されて私の目の前に連れてこられる。

「ねえ冗談でしょー！？…… ああ海鳥、早くしなさい」

「オレは本気だよ…？」ああ海鳥、早くしなさい

「海鳥ちゃんもなんとか言つてよー？」の人を止めて…」

- 1 -

「いやつ！誰か、誰か助けてえええええええ！」

私は何も言つたことが出来なかつた。彼女はどうにかして逃げ出そうと暴れてい。無駄だ、そんなことをしたつて北斗からは逃げられない。悲鳴がつるさいほど聞こえてくるがまるで現実感がなかつた。

「わあ、海鳥」

嫌だ

- ၁၁၁ -

嫌だ殺したくない

- わね！ -

殺さなかつたら私も捨てられるんだつづか

「やあ！――

捨てられたくない

殺せ！　！　！　！　！



初めて能力以外で人を殺した。

包丁が刺さった胸からは鮮血が溢れ出し私の体を濡らしていく。北斗は冷たくなつていいく元彼女を私の方に押しやると高笑いをあげはじめた。彼女さんの体はだんだん冷たくなつてきていて、その驚愕と憎しみに彩られた表情が私の心を破壊した。手にはまだ胸を刺した時の感触が残っている。

その夜私は北斗に抱かれた。血まみれのままで彼女の死体を目の前にしながら。

すごく痛かつたけど北斗を深く感じられてとても嬉しかつた。こんなときに喜びを覚えるなんて、私はなんて浅ましい女だろう。生気を失つた彼女の目が私を非難しているように思えた。

「海鳥。オマエはオレの所有物だ。離れることは許さない。勝手に死ぬことも許さない。オレの言葉を聞いてオレのために生きろ。オマエはオレが初めて手に入れた物なんだから」

そう私は北斗の所有物。

最初に言っていたではないか。それを忘れて家族ごっこをしていました私が悪い。

私は北斗の最初の物。

ならば北斗の言葉に逆らうことはできない。あの女が死んだのだって北斗に飽きられたのが悪いんだ。だから私は悪くない。

私は黑夜海鳥。

この黒い夜のような闇の中を北斗に先導されて飛び続ける海鳥なのだから。

その後も私は何かに脅えるように、何かを言い聞かせるように北斗との行為に溺れていった。



北斗の部屋に新しい住人が増えた。

あの超超言つてた女の子、絹旗最愛だ。どうやら私と似てゐるから北斗が拾つてきたらしい。二人は楽しそうに笑つている。私は北斗に飽きられてしまつたのだろうか。嫌な想像が頭をよぎるが頭を振つてそれを打ち消す。

「北斗！私を抱きしめてくれ」

「どうしたんだ？今日はやけに甘えん坊じやないか

「超甘えん坊なんですねえ」

「羨ましいんだろ絹旗ちゃんは

「ち、違います！」

「仲良くじろよ一人とも」

私がこんな奴に劣つてゐるはずがない。今までずっと北斗の役に立つてきたんだ。

なあ北斗。私はお前の言つことならなんでも聞く。他に女を何人侍らせようが構わないし、統括理事長だつて殺せと言われば殺すし死ねと言われたら喜んで死ぬ。そのために体中改造してまで役に立つうと力を求めたんだ。だから…

だから私を捨てないでくれ

## 番外編～黑夜海鳥の過去～（後書き）

氣分の悪くなつた方は申し訳ありません。  
黑夜の過去を描く閑話でした！

本編の前にこんなことがあつたんですねえ…

まさに外道！な主人公ですがこれでも彼なりに黑夜を愛しているのです。

どう考へてもやりすぎですが（笑）

しかし研究所時代の描写がひど過ぎますねー  
陰惨さのかけらも表現できていません。

でも純真な黑夜を書くにはこの時代しかなくて…作者の腕不足を嘆くばかりです。

この話批判しそうだなあ…

じつはこの話は黑夜に

「他に女を何人侍らせようが構わない」

とこうセコツフを言わせたいがために生まれました（笑）

## 第七話（前書き）

前話に力を入れ過ぎたせいか黒夜以外が絡む姿を考えられずに投稿が遅れました。

アイテム攻略ルート終わったらひたすらいちゃいちゃさせよう（笑）

学園都市にあるとある喫茶店、そこに無氣力無表情少女こと滝壺理后はいた。どうやらプライベートのようであり、アイテムの面々はない。そこで滝壺は何をするでもなく座席に身を預け視線を虚空に向けている。誰かと待ち合わせでもしているのだろうか。

「じめん、待たせちゃつたかな？」

「ううん、大丈夫。そんなに待つてない」

やつてきたのは御門北斗。今日は黑夜を連れてきておりず一人のようだ。滝壺は北斗を見やると相変わらずの無表情で答へる。

「やうなのかい？それにしても紅茶が冷めてしまつてこらぬやうだな  
ど」

「ちよつと早く来すぎただけだから問題ない」

「それでも待たせちやつたのには変わりないから、せめていいの代はオレが持つよ

「ありがとう、みかど。それで今日は私になんの用?」

「「」の前海鳥を預かつて貰つたからお礼でもと思つてね。迷惑をかけていなかつたかい?」

「大丈夫、大人しくしてたよ。でもお礼なんて別にいいのに」

「お礼と言つても食事を奢るくらいしかできないけどね」

北斗が彼女を呼びだしたのはお礼をするためのようだ。もつともお礼にかこつけて食事に誘つているようにしか見えず、それは滝壺も察したようだつた。

「……わたしと食事がしたいの?」

「さすがにばれちゃつたか。滝壺はオレとデートするのは嫌かな?」

「私は別にいいけど、むぎのはいいの?」

「これは痛いところをつかれたな。でもオレにとつては沈利とは別れたつもりだつたし、滝壺が可愛かつたからね。君にとても興味があるんだ」

話を逸らじて誤魔化している。しかもまだ一度しか会つていない相手に面と向かつて言つセリフではないだらう。

「でも私といったって樂しくないと思つけど」

「滝壺みたいな美少女と一緒にならそれだけで樂しいよ

「みかどは女たらしなんだね」

「はは、手厳しいな。……食事まだまだ時間があるから少し付き合つてもらえないかな?」

「ビニへ行くの?」

「それは行つてからのお楽しみさ」

そう北斗が言つた後一人は連れ立つて喫茶店を出て行つた。女たらしだということが見破られていたが大丈夫なのだろうか。そしてその一人の後を追う小柄な人影があつた。

「私には超手を出してくれないのに滝壺さんとは『テー』トするなんて

「

一人がやってきたのは高級ブティック。ちなみにここは第七位を除いたレベル5御用達である。当然ながら値段も相当な額になる。

「服を買ひの？」

「滝壺のをね。予約しているのがドレスコードのあるレストランだからオレはこの格好でいいとしても滝壺はちょっとね」

北斗が苦笑しながら話す。そもそもそのはず、滝壺の格好はいつも通りのピンクジャージ姿だ。

「…私はジャージでいいのに」

「ああたまにはいいじゃないか。代金はオレ持ちなんだしさ」

「……今日だからね」

「ありがと。じゃあ採寸してもらひて衣装を選ぼつか」

「……とても似合つてこる。思わず見惚れてしまつたよ

「わ、そうかな?」こんなドレス着たことないから少し恥ずかしい…」

滝壺が着ているのは淡いピンク色のフォーマルドレス。肩口などは大胆に露出しており、普段は隠されているスタイルの良さがでている。やはり着なれないせいか、それとも肌を多く見せていているためか頬をうつすらと染め恥ずかしがつている。どうぞのバー好きが見たら思わず鼻血が出てしまうのではないだろうか。

「あなたに恋をした。あなたに膝まづかせていただきたい、花よ」

「大げさだよ……本当に似合つてる?」

「もちろんさ! 元がいいんだから普段から着飾ればいいのに」

「……考えておく」

「ではお嬢さん、お手を。不肖私がエスコートさせていただきます」

「……うん」

北斗は仰々しく膝をつくと恭しく滝壺の手を取りその手に口づけする。こきなりのことに滝壺は顔を真つ赤にして慌てふためいている。それにしても北斗、キャラが変わりすぎである。この分だと結婚詐欺師もいけるのではないだろうか。そしてその光景を服の陰に隠れながら見つめる影。

「やつぱり、やつぱり超胸なんですかっ！」

「お客様、その手に握つていらっしゃる服は皺になつてしまつたので買取りいただく」となりますが…」

「…いへりですか？」

「40万円になつます」

「え、っ

「（最愛のやつなしにこなさんだ…）」

場所は変わつて二人がいるのはレストランの一室。360度全方位モニターによつて自由に風景が変えられる部屋であり、ここで食事をするには相当の値段がかかる。北斗が今日だけでいくら使つたのか見当もつかない。現在この部屋の光景は宇宙に設定されており二人の頭上には満天の星が輝き、眼下には美しい地球が見える。

「綺麗……」

「この映像は現在衛星が撮つてゐるものとリンクしているんだ。この光景の中にオレ達もいると思つと不思議な気分になるね」

「うん……」

滝壺はこの光景に圧倒されているのか言葉が少なくなっている。出された料理の味もろくにわかつていないのでないだらうか。北斗はそんな滝壺を微笑ましげに眺めている。

「けど学園都市にドーレスコーナーのあるお店があるなんて知らなかつた。学生の街なのにドーレスってそんなに需要あるの？」

「ドーレスは基本的にVIP用なんだ。君のために特別に用意したんだよ。気に入ってくれたかい？」

「うん……す、いい気に入った」

「それはよかつた。苦労して用意した甲斐があるとこつもんだ」

苦労したといつても北斗はコネを使ってこの部屋を用意したのそれほど労力はかかっていない。そもそもうだなければこれほどの短期間で用意できるわけがない。

「会員以外は入れないってビリーフありますかー…これから超どうすれば……」

現在一人は部屋に備え付けられたソファード北斗が注文した果実酒を眼前の地球を前に飲んでいる。アルコール度数は高めだが女性でも飲みやすいようになっているものだ。普段の滝壺なら警戒して飲まなかつただろうが、今は既に雰囲気に酔つてしまつていてのを勧められるがままに飲んでいる。

「どうだどう、今日のお礼は楽しんでもらえたかな？」

「うん、とても楽しかつた。ありがとうみかど」

「お礼を言いたいのは」ちらの方。「こんなに可愛い女の子と一緒に過ごせたんだからね」

「可愛いだなんて……」

「恥ずかしがらないでその綺麗な顔をオレに見せてくれないか？」

恥ずかしがつて顔を背ける滝壺だが、北斗は右手を頬に添えると自分の方に向けさせる。両者の距離はわずか10センチ、アルコールと雰囲気に酔つていい滝壺はとろんとした目で熱に浮かされたように北斗を見つめてくる。

「……みかど……」

「北斗って呼んでくれ

「……ほぐと……」

「理后……」

至近距離で見つめあつていった二人の影が重なる。それは周りの光景も相まって幻想的な雰囲気を放っていた。やがて二人はいつたん離れたがすぐに滝壺が北斗にもたれかかり、頭を北斗の肩に預けていた。

「（胸がどきどきする……これが恋？）」

「ほぐと……私は嫉妬深いからね……」

「（…………スつたかなあ）」

結局気になつて眠れない絹旗だった。

「一人は今頃ビーチでくつろいでいる。……まさかホテルで起あんなことやしないことを…。」

「ここから早く寝りよ（まやつてんだりなあ）（あなづりだなあ）」



## 第七話（後書き）

アイテム攻略ルート次の犠牲者は滝壺です！

滝壺は浜面の！という方はすみません。

作中では簡単に落とされてしまったように感じるかもしれません  
が、実際は惚れている訳ではありません。

雰囲気に流された感が強いですし、ざきざきしたのは単にお酒を飲  
んで心拍数が上がつただけです。

それを滝壺は恋と勘違いしたんですが、勘違いも気づかなければ本  
物になりますし。

これからも定期的にケアすれば完全に惚れてくれるでしょう。  
けど滝壺は嫉妬深いので主人公が刺されないか心配です（笑）

## 第八話（前書き）

田常パート書くの楽しいけどストーリーが進まない…

今日は金髪碧眼のあの子が！

第三学区。学園都市の最先端技術を紹介する国際展示場が数多く並んでいる学区であり、外部からの客を多く招く為にホテルランクも学園都市最高である。その第三学区の最高級ホテルの一室に御門北斗はいた。バスローブを着ており、シャワーでも浴びたのだろうか、濡れた髪を拭きながらソファで寛いでいる。そんな中、北斗の携帯電話が着信音を響かせる。

「こんな朝早くからかけてくるなよ。はいはい行きますよ。……っ  
たく

「用事ができたの？」

声をかけてきたのはベッドに横になる少女。こちらは全裸であり、申し訳程度にシーツが体にかかっているだけだ。低血圧のかぼーつとしている。少女の名前は滝壺理后。前日のデートからそのまま北斗と一夜を明かしたらしい。なお、ベッドの上では積極的だったことを追記しておく。

「起きてたのかい？用事つて程じゃない、ただの『トーントの誘い』。  
……………とりあえず落ち着こい。『トーント』じゃなくて仕事だから。その持ちあげたオブジェを下ろしてもらえないかなー！？」

先ほどまでの無気力な姿とは打って変わり、滝壺はその身を起こし10キロはありそうな奇怪なオブジェを片手で持ちあげている。やがて納得したのかオブジェを元の場所に戻し北斗にジトつとした目を向ける。

「笑えない冗談はやめて」

「今のはオレが軽率だった、すまない」

「ほくどが私以外の女の子にも手を出してるのはなんとなくわかるけど、その子達のことも後でちゃんと教えて。…………悪い虫なら潰すから」

「今は理屈しか見てないさ」

「…………嘘つき」

「（心うじてばれた……）」

誤魔化すように滝壺をベッドに押し倒す北斗だったが内心冷や汗ものである。…本当に後ろから刺されるかもしない。

人目につかない路地裏に停まっているキャンピングカーの中に三人の人影がある。御門北斗、黑夜海鳥、土御門元春、暗部組織『グープ』の構成員である。

「…遅れて来たと思つたらなんだか疲れてるみたいだけど大丈夫か  
いやー？」

「ちょっと朝から修羅場つてな…。それはともかくこの前の猫耳パ  
ーツありがとな。しかしそくあんなもの手に入つたな」

「仕事で研究所に潜り込んだ時偶然見つけていやー。盛り上がつた  
だろ?」

「もちろん。あの時は海鳥もいやーいやー言つてくれてな」

「…一人で馬鹿話してないで早く説明しりょ。それに一人足りない  
みたいだけ?」

「…………ちょっと北斗さん。なんかこの子今日はシンボレしてない  
みたいでけいじつかしちやつたんですか!?」

「いや、最近女子を部屋に住まわせることにしてな。似たポジシ  
ョンだから危機感抱いてるんだろ」

「なるほどにやー。黑夜にも可愛ごとにいるあるじやないか」

「うるさいー! ここから早く説明しりー!」

土御門にからかわれて声を荒げる黑夜。北斗に内心を見透かされて  
いたこともあってか顔が真っ赤だ。

「はいはい、オレ達三人しかいなのはアイツが戦闘タイプじゃないからだ。今回は人手が足りないわけでもないしな」

「俺はアイツのこと苦手だから助かるぜー」

「アイツのことはいいとして、私たちを集めるなんてよっぽどの大事か？」

「いつも通りの仕事さ。ただ一人でやるには面倒だから三人でやれとれ」

「結局なんなんだ？」

「どこの研究員が研究成果を持ちだそうとしたらしくてな？その研究員はもう捕まつたらしいんだが外部の組織と渡りをつけてたらしい。それで海鳥には待ち合わせ場所に現れるだろう連中の殲滅を、土御門には他にも研究を持ちだそうとしたやつがいかが研究所に潜り込んで調べてもらつ。俺はその研究員が逃走に使つた雑貨稼業デパートを殺害してくる」

「私の担当は皆殺しでいいんだろ？」

「構わない。じゃあわざと終わらせるわざ」

三人はそれぞれ自分の担当を処理するために散つていいく。そこで土御門がふと思い出したように北斗に尋ねる。

「そういえば舞夏がお前に会いたがつてたんだが、まさか手を出し

てたりしないよな?」「

「…… わあ仕事行かなきゃな!」

「うううと待て…手出しちゃうのかー…?出しちゃうのかー…?」

土御門が聞いただやうとした瞬間、北斗はその場から消え去った。

「北斗もおおおーーー!」

第十五学区は学園都市最大級の繁華街であり、流行の発信基地として機能している。テレビ局やマスコミ関係の施設が立ち並ぶこの学区はもつとも地価が高い学区もある。

そんな中にマンションと企業オフィスを合わせたような巨大な総合ビルがある。そんじょそこらの一戸建ての購入金額を上回る程豪華な建物だ。その最上階。そこが『雑貨稼業』<sup>デパート</sup>と呼ばれる男の住居であり、仕事場でもある。一面のウィンドウから広がる景色はその辺のレストランにも劣らないだろう。

「いい部屋だな。オレの部屋程じゃないが」

「そう妬むなよ。別に居心地の良い場所つてわけじゃない。あくまで『隠れ家』の一つだからな。ガサ入れがあればすぐに捨てなきやいけない物件なんてろくなもんじゃない」

部屋の主である大学生ぐらいの男は、椅子に座つたまま肩をすくめてそんなことを言った。やくざのような北斗を前にしても態度が変わらないのは慣れているからだろう。

「まあ、何があつたかは気かねえよ。あんたは可愛いウエイトレスに注文を頼むような気軽さで必要な物を言ってくれればいい。お望

みの品は何か？逃走用の車？隠れ家の鍵？それとも『両替』かな？強盗した現金のロンダリングなら、今日のレートは0・78だ。なんなら変装や整形も紹介するよ」

男はお勧めの料理説明するような調子で逃走や潜伏に必要な物を羅列していく。

「『ソレ』も商品の一つなのかい？」

「ん？ そっちに興味があるのか。悪いけどそれはオプションじゃなくて俺の趣味みたいなもんだよ」

一人の視線の先にあるのは鎖で吊り下げられた十五歳程度の少女。下着だけの人間が両手を枷で戒められたまま吊り下げられている。ところどころに青黒い痣を残す少女は羞恥に身をよじることもなく力なく揺れていた。まだ生きてはいるのだろうが瞳に生氣を感じられない。

「いい趣味じゃないか。高かつたる？」

「そこそこね。おい、ホントに壊すなよ。殺しちまつたら最低でも八百万は払つてもらうからな」

「売春させじるわけでもないのか」

「そいつは殴るよつなんだよ。そろそろ駄目になつてきたから新し

いのも買つたんだがまだ仕入れたばかりでね。薬で眠つてゐるから別室で拘束してゐるんだ。それともアンタはこういつ貧乳が好きな訳？

「貧乳はステータスだよ。まあもう女を見る事もないんだから彼女で我慢しどきな」

「は？」

北斗が言つたことを男は理解できていなかつた。

男の腹から腕が伸びている。いつの間に回り込んだのか北斗が後ろから腕を突き刺したのだ。奇妙なことにその手は一切血に濡れておらず、また傷口からも血が流れていない。

「ぐつ……な、なにしやがる……」

「おいおい、第一声がそれか？ 腹を貫かれて血を吐かないどころか血が流れていのを不思議に思わなかつたのか？」

「…なに？」

「段々寒くなつてきただろ? 血を吸つてゐんだよ。全身の血を吸わ

れて死ぬなんてなかなか経験できないと思わないか？」

「や、やめ……」

「枯れ落ちる」

男は見る間に干からびていき、最後には塵となつて砕け散った。そしてそれを成した北斗は捲れ上がつた袖を元に戻すと何事もなかつたかのように少女に近づいていく。男が死んだのを見た少女は僅かに光の戻つた瞳で北斗を見つめる。

「……助けに来てくれたの？」

「ああ、そうだよ」

「……ありがとう」

「辛かつたろ？もう大丈夫だからね」

「うん……本当にありがとう……」

「……なんて言つと思つた？」

「え……」

少女はその意識が途絶えるまで自らの胸に生えた腕を信じられない目で見つめていた。助けが来たと思った直後の裏切りに少女は何を思つたのだろうか。せめてもの救いは絶望を感じる前に死ねたことだろうか。

「いやー最後の顔は見ものだつたなあ。今日の仕事は当たりだ。…さて、海鳥はもう殺し終えたかな?」

北斗は罪悪感を感じる所か嬉々とした表情すら浮かべている。普段はまともに見えてもやはりどこか狂っているのだろう。そしてその興奮冷めぬまま携帯を取り出し、通話し始めた。

「もしもし海鳥?そつちまもつ終わつたか?」

『とつぐに終わつてゐる。私はもつ帰つてもいいのか?』

「土御門はまだかかるだらうからオレ達は先にあがらうか。今日は気分がいいから外食でもしに行こ!」

『どうせ死に顔が面やかたとかそんなんだろ?とつあえず先に帰つて待つてるよ』

「やつぱり海鳥にはわかるか。じゃあまた後で」

その後も電話で下部組織に後始末を命じつつ北斗は部屋の中を歩き回る。まるで下見をしているかのようだ。

「…………もいい部屋だよな。セーフハウスの一つとして買っておくかな?………… そういえば新しいのを買ったとか言ってたか」

何の氣なしに別の部屋に通じている扉を開けた北斗の目に飛び込んだのは床に座り込んだ人影。まだ薬が抜けきっていないのか瞳が虚ろだ。少しは意識が回復したのかやがてその人影は北斗を見つけると呟いた。

「…………お腹すいた。にゃあ

「…………幼女…………?」

そこにいたのは金髪碧眼、ゲームの中にでも出てきそうなアイドルのような格好をした10歳くらいのつに先日知り合ったばかりの少女に似た女の子だった。

## 第八話（後書き）

前書きのせいでフレンダ回だと思いましたか？

残念、フレメアです（笑）

いや、本当はフレンダメインで書こうとしたんですが書いてるうちに性的にも猟奇的にもノクターン行きになりそうで…；それ以外だと黒夜や滝壺とアイディアが被るんですよねーなので苦肉の策で妹です。○rz  
アイディアがでないとはスランプか！？

この主人公は非道です。

あそこで助けるのが一方通行、嬉々として殺すのが御門北斗。  
あの吊るされてた少女も街でナンパされてるとかなら北斗にも助け  
てもらえたでしょうに…；助けられて落とされて殺されそうですけ  
どね（笑）

## 第九話（前書き）

お待たせしました第九話です！

フレメアって将来フレンダより美人になると想いませんか？

あたりが暗闇に包まれた第七学区。完全下校時刻をとうに過ぎているため昼間とは違った学生の姿は見えない。そんな中、息を切らしながら走る人影があった。

「なんで、なんであの子が……！」

走る人影の名前はフレンダ＝セイヴェルン。暗部組織『アイテム』の構成員を務める金髪碧眼の女子高生である。普段とは違い一切の余裕をなくしている。

「待つってね、今お姉ちゃんが助けに行つてあげるからー！」

なぜここまで焦っているのだろうか？

仕事もないため彼女が自室で休んでいたところ携帯に妹からメールが来た。なにがあったのかと訝しみながら確認したところ、彼女の目に映つたのはどこかに寝かされている妹の姿。さらにメールには

『妹を返してほしくば第七学区にある マンションの最上階まで  
来い』という文章と地図が添付されていた。それを見たフレンダは  
驚愕し、最低限の装備を整えるとメールに書かれている場所に向か  
つたのだ。

「今まであの子のために暗部でやつてきたんだ。結局、どこの誰だ  
か知らないけど私の妹に手を出したんだから許さない訳よ」

氣炎を上げながら走るフレンダ。妹を攫われたことが逆鱗に触れ  
たらしい。そんな彼女の前に地図に記載されたマンションが見えて  
きた。彼女はひとまず物陰に身を隠し、マンションを観察する。

「——のマンションな訳ね。…………周囲に見張りらしき人影は無し。  
監視カメラは玄関ホールを二台、エレベーターホールに一台、死  
角はない。見取り図によれば最上階への侵入経路は直通エレベータ  
ー一つだけ専用のキーか最上階の部屋からしか操作できない。  
……奇襲は無理な訳」

トラップがメインのフレンダにとつては正面から堂々と行くのは避けたいところだが侵入経路が一つしかない以上何か仕掛けることもできない。それに状況を考えるとあまり時間をかけてもいられない。

「とりあえず下部組織の連中に爆弾を運びこんで貰つて……今から  
最低でも三十分はかかるだろうからすぐに爆破してもらひとしても

それまではなんとか時間を稼がなきゃ。………… 麦野や絹旗なら正面突破も可能だろつけどこんなことは頼めないし、………… 結局私の力不足な訳よ」

自身の力不足を嘆きながらも気を取り直し、下部組織に爆弾を偽装して運びこむよし指示を出し、マンションに向かっていく。

「爆発で敵が動搖した瞬間を狙つてフレメアを確保、隙を見て射殺か拘束するしかない訳ね。…… 視線を誘導するためにスカートでも短くしとくかな」

成功する可能性がお世辞にも高いとは言えない作戦を取らざるを得ないことに歯がみしながらも、言つ通りに自分が来たことを告げエレベータに乗りこむ。

「（残りは一十五分。最悪の場合は私の体を使ってでも時間を稼がなきや…。待つてねフレメア、お姉ちゃんが必ず助けてあげるからー）」「

悲壯な覚悟を抱きながらも妹だけは絶対に助けると誓う。そしてエレベーターの扉が開き妹が囚われているであろう部屋に駆け込んでいく。

「フレメアー無事なのー? 今お姉ちゃんが助けてあげるか……」

……？」

勢い込んでドアを開けたフレンダの田に飛び込んできたのは…

「グリーンペース。」やあ

「嫌いなのか？好き嫌いせずに食べないと素敵なレディーになれないぞ？」

「ぐつ、北斗の膝の上は私の定位置なのにつ」

「ほへと、早速浮氣…？」

「持つてゐるコップに超籠入つてますけど滝壺さんつてそんな力ありましたつけー？」

「…………え？なにこれ？捕まつてゐんじやない訳？」

わいわいと料理を食べるフレメア、北斗、黑夜、滝壺、絹旗のほのぼのとした光景だった。

「あつフレンダも来たんですね。遅いんでもう先に食べてますよ」

「お姉ちゃん久しぶり。」やあ

「…………これどういう状況な訳？結局、絹旗と滝壺は何でここに

る訳よ」

フレンダにしてみれば妹が捕まっていると思つてきたのに当の本人は普通に食事をしている。混乱して状況がまったく掘めていないようだった。

「おい北斗、 アイツになんて説明して来させたんだ？」

「普通に呼んでも面白くないから誘拐した風にな」

「私はそんな騙されたふれんだを応援してる」

よつやく思考が落ち着いてきたフレンダだったが、まだ状況は掘めていなじようだった。説明を求めるように妹を膝の上に乗せている北斗に尋ねる。

「…結局なんでフレメアがここにこる訳？」

「話せば長くなるんだが…」

と、北斗は現在の状況に至るまでを話し始めた。

『雑貨稼業』の男が使っていた部屋で少女を見つけた北斗だが、殺すにせよ助けるにせよ流石にいきなりはないだろうということでお嬢に話しかけることとした。

「初めまして、お兄さんの名前は御門北斗ってことだな？」の名前を教えてもらえたかな？」

「フレメア。フレメア＝セイヴェルン」

「セイヴェルン？ フレンダの妹さんかな？」

「『』やあ。お姉ちゃんを知ってるの？」

「ああ、つい最近知り合ってね」

答えながらも北斗はフレメアと名乗った少女を観察する。確かに金髪碧眼といいフレンダと似た部分が多い。見れば見るほど人形の様な少女である。

「（姉より美人になるんじゃないかな…？）フレメアちゃんはびびってこんなところにいるのかな？」

「知らないおじさんがくれたお菓子を食べてたら眠くなつて……それで起きたらお兄ちゃんが田の前にいた」

「知らない人にももらつたものを食べちゃ駄目じやないか。どこか痛いところとかはないかい？」

「大丈夫。それよりお腹すいた。」「あ

「じゃあ何か食べさせてあげるよ。お兄さん着いてきでもらえるかな？」

「いやー。おんぶして」

「仕方ないな。しつかりつかまるんだよ」

「いやーいやいやいやー」

「…なに言つてるかわからないけど髪をこじるのはやめてもらえないかな?手入れには気を使つてるんだよ」

「お兄ちゃんの背中あつたかいにゃあ」

「寝てもこじよ(せて寝たらフレンダに誘拐メールでも送りつかね)」

つい先ほど少女を惨殺したとは思えない優しさを見せた北斗はフレアをおぶつて歩いていく。内心では悪趣味なことを考えていたが…。結局その姿は誘拐にしか見えなかつた。

「とまあ、 いんない感じでここにいるんだ」

「結局犯人は御門じゃなくても誘拐はされてた訳！？助けてもらえたのはありがたいけど…………絹旗と滝壺がいるのはなんで？」

「最愛は最近ここに住み始めた。理后はフレメアとここに来る途中に会つたんだが……」

「私はほくとをストーカーしてたら知らない女の子と一緒にだつたら浮氣かと思つて」

AIMストーカーならぬ北斗ストーカーである。レベル付けするとしたらレベル5はあるだろう。

「あんた達付き合つてる訳？でも麦野とヨリ戻したんじゃ……」

「北斗は超女たらしですからね。フレンダも気をつけた方がいいですよ」

「…………ほくと、 それ本当？」

「待て理后！ 他のはともかく北斗はヤバいからー！？」

「北斗に手出すンなら殺すぞ？」

「ふざやー。お兄ちやんをこじめないで」

滝壺は田をくわあーと見開きビームから取り出したのか包丁を北斗に向け、黑夜は窒素爆槍を発動させ、フレメアは北斗の膝の上で威嚇する。そして北斗は戦々恐々としながらそれを見ている。もう力オスだつた。

「とにかくフレメアが無事でよかつた訳よ」

「ドオーンー！」

フレンダがほつと一息ついた直後に階下から爆音が響き渡る。

「敵襲かー？ 海鳥は迎撃ー 最愛はフレメアと理屈を守れ！」

「うーんに襲撃かけるなンて死にてよつだなアー！」

「滝壺わんとフレメアちゃんはいひちーー！」

「お兄ちやん……」

「大丈夫フレメアもお姉ちゃんもお兄ちやんが守つてあげるから

「…………」

「…………ふれんだ、じうしたの？」

各々が急な敵襲に対応するために慌ただしく動き始める中、フレンダは顔を青くして拳動不審気味に視線を左右に揺らしている。滝壺が最初に気づいたようだが誰が見ても怪しく感じるだろ？

「… そういえばフレンダは爆弾しかけるのが超得意でしたね」

「フレンダお前まさか……」

全員の目がフレンダに集中する。やがて視線に耐えられなくなつたのか大声で言い訳し始めた。

「し、仕方ない訳よ！私は誘拐されたんだと思つてたんだし…つい爆破中止を指示し忘れたなんてある訳……っ…？」

盛大に自爆している。全員の目が厳しくなつたがフレメアはよくわかつていないうだ。

「ぶち殺すぞテメー！」

「これは超お仕置きが必要ですね」

「さすがに私も庇えないかも」

「よくわからないけどお姉ちゃんが悪いと思つにゃあ

「結局私が悪者になる訳ーー?」

まさに四面楚歌。追い詰められたフレンダに逃げ場はないよつて思われた。

「まあみんなどうあえず落ち着けよ」

「御門ーーやっぱアンタはいい男な訳よーー!」

北斗がフレンダを庇つたことが意外だったのか全員の視線が集まる。

「フレンダへの追及は後にしておいてまずは後始末だ。警備員にも踏み込んで来られると面倒だからな。それまでフレンダは縛つて転がしておくれ!」

「助けてくれるんじゃない訳ーー?つって縛るの早つーー?」

「……亀甲縛りとは北斗もマニアックだな」

「ほぐとが縛りたいなら私もしばつていいよーー!」

「いいから後始末いくぞ!」

結局フレンダは逃げることはできないうち。北斗に一瞬にして縛

られフレメアにつつかれている。縛り方が縛り方なのでただでさえ短かつたスカートが捲れ上がりすごいことになつていて。無駄に扇情的な下着だが本人の雰囲気でいろいろと台無しである。

「ちょっとパンツ見えてる…? フレメアもつつかないで! ……あつ、動いたら縄が食い込んで…」

「やつぱりフレンダは超ドMなんですね」

「大丈夫。そんなふれんだを私は応援してる」

「いやー。縛られると気持ちいいの? お兄ちゃん、私も縛つて

「いやそれは流石に…」

「私の時もフレメアと同じくらいだったり」

フレメアの爆弾発言に北斗はたじたじだ。普通に縛ればいいのに悪乗りしてしまつたのが失敗だつたかもしない。フレンダは縛られてるにも関わらず頬を赤く染めており、滝壺はそれをちやつかり写メつている。… いつたいそんなものを撮つてどうするのだろうか。その後も騒いでいた六人だつたが緊急車両のサイレンを聞いて慌てて後始末に動き出すのだった。



## 第九話（後書き）

フレメア可愛いよフレメア（笑）

危機管理の低いフレメア、可愛い女の子なら誘拐されちゃいますよねえ。

それはともかくフレメアって寮住まいでしたっけ？

そこいらへんうる覚えで（汗）

滝壺はだすつもりなかつたのにいつの間にか出てきた……何を言つてるかわからないと思つが作者が一番わからない。

## 第十話（前書き）

田常パートが続を過ぎてひょひょじだしてきただんで今回でひととおり終了！

麦野とフレンダ？

麦野は過去に攻略されてるし、フレンダもどうだし時間かけて調く

Y……攻略を！

その後、フレンダの爆破騒ぎのせいで駆け付けた警備員を上から手を回してもら「どうにか追い払った北斗たちはようやく一息つくことができていた。余談だが、この件は能力の暴走ということで処理され、急遽用意された何処の誰とも知らない男が警備員に連れてかれている。

「まったく。騒ぎにもなつてしまつたしほとぼりが冷めるまでここから離れたほうがいいかもな」

「すみませんでした北斗。うちのフレンダ<sup>バカ</sup>が超迷惑をかけたばかりに」

「気にはんよ。後で本人に迷惑料請求しとくし」

「ちょ、ちょっと待つ訳よ！？いくらか知らないけど私そんなにお金持つてないわよ！？」

「北斗に迷惑かけたお前が悪い」

「ふれんだの自業自得」

「ひまあ。お姉ちやんつねーこ」

「わざと『お嬢門』のせこなのこびどこ見よ…」

黑夜や滝壺はおろかフレメアにまで邪険に扱われざめざめ涙を流すフレンダ。なお本人は未だに縛られたままである。

「俺としては体で返してもうつても構わないが?」

「私の体が担当でな訳!つて滝壺はなんで怖い顔してじり寄つてくるのよー?」

「せーとを誘惑するなんて許せない」

「理不眞一?こせ闕節はせひはねは曲がりなここここここここここここ!」

「滝壺さんってあんなキャラだったんですね…」

「お姉ちやん楽しけり」

「なあ北斗、本当に体担当だったのか?お前無理やりは嫌いだったはずだわ」

「こや暗部の仕事をただ働きでやつてもりおつと考えてただけなんだが……あいつレイプ願望でもあるのか?…眞ついた時一瞬目を輝かせてたぞ…」

滝壺によつて関節をあり得ない方向に曲げられよつとしているフレンダを眺める北斗たち。北斗や黑夜、フレメアは平然としているが絹旗は滝壺の意外な一面にショックを受けているようだ。ちなみに北斗に体で返せと言われたときにフレンダが目を輝かせていたのは事実である。どうやら真性らしい。

「おーい理后！ 関節極めるのはそれくらいにしておいて肉体的にじやなくて精神的に責めた方が後に響かなくていいぞ。例えば裸に向いて窓際に立つておくとか」

「それ変態を喜ばすだけだな…」

「わかつた。もつまくと色田なんか使おうと思えないくらいつっかりと調教しておくれ」

「そんなことされたらむつお嫁に行けなくなつかけつー…でも見られたらと思うとそれはそれで…」

「なんでお姉ちゃんは喜んでるの？」

「あれはドMの変態と言つてな？ 誰かに恥ずかしいことを見られたりいじめられたりすると性的興奮を得てしまうんだ。ビリやリレイプ願望も持つていいようだから間違いないだろ」

「つてあなたは子供になんて」と教えてるんですかー」

「私は子供じゃない。大体ブラもつけてる」

「姉とは違つて将来有望なんだな。海鳥だつてつけ始めたのは結構最近なのに」

「私はこれからなんだよー。絹旗も優越感に満ちた笑いをやめりつー。」

フレメアは姉とは違つて将来性があるみつだ。少なくとも後数年で姉を超すことは間違いないだろう。また黒夜は成長が遅いだけで将来性がないわけではない。なにせ初潮もまだ来ていないようだし。もつとも本人にとつては最悪豊胸すればいいとも思つていいようだが。

とその時ピコンポーンと来客を告げる音が響き渡る。

「ここな時間に誰でしょ?」

「あつと沈利だな。フレンダが来る前に呼んでおいたんだよ

フレンダが来る前に滝壺も合流したことから除けものにするのも後が怖いしどせだからアイテム全員あつめてしまえ、と北斗が呼んでいたのである。急な呼び出しだったためか少し遅れたようで今到着したというわけだ。実際には、北斗からの呼び出しどうことであーでもないこーでもないと着ていく服を選んでただけなのが。結局ロングスカートワンピースとお淑やかな服装にしたようである。

「待たせたわね北斗。なんか騒ぎがあつたみたいだけじどつしたのつて…………何してんのよフレンダ」

「（チャーンスー）む、麦野…御門が嫌がる私を無理やり…」

「北斗…あんた…」

「（ふふふ、修羅場発生な訳よー私を弄んだ報いを受けなさいー）」

どうやらフレンダは麦野をつけて北斗に意趣返しをしたいようだが  
散々悦んでおいてそれはないだろう。だが麦野は顔を俯かせて震え  
ており、その場にいる面々は麦野の発する雰囲気に圧倒されている。  
なぜか北斗はそれを見てもニヤニヤとしていたが。

「どうかしたのかい沈利？」

「どうかしたじゃないわよー」こんなに楽しそうなことを私抜きで始  
めるなんて！

「「「「は？」」」

ぽかんとした表情を北斗を除く全員が浮かべている。修羅場になる  
と思っていたのにその人物が違う意味で怒っていると知ったのだから  
当然だろう。そんな麦野にフレンダは混乱しながら恐る恐る訪ね  
る。

「えっと麦野？御門に浮氣されたと思つて怒つて怒つてるんじゃない訳  
？」

「なんで北斗が浮氣したからって怒んなきゃならなーのよ~もし浮氣したとしてもその相手の女を消せばいいだけでしょ。…それより私が言いたいのは『なんないじめがいがあるシチュエーションを私が来る前に始めてる』とね~」

「…………（ええー）…………」

「…………」  
「やつぱつあれかしり~呪を舐めさせたり鞭で叩いたり…………で  
も逆に懲と北斗に犯されたりその後に間女を調教するつてこののも  
に要素はなー。

「やつぱつあれかしり~呪を舐めさせたり鞭で叩いたり…………で  
も逆に懲と北斗に犯されたりその後に間女を調教するつてこののも  
に要素はなー。

「ちよつと麦野。」  
「…………」  
「あらあんたもいたの~。」

「ちよつと麦野。」  
「…………」

「滝壺もこねじやなー。やつかの小さく子ね~。」

「……」

「フレンダの妹だよ。こりこりあつて連れてきたんだ

「へえ、可愛い子じゃない。……それよりあれいじめていいの?」

「元田三九

「わたしが調教してたのに」

「滝壺にもそつぬう趣味があつたの?なら一人でやりましょ

「このうえ麦野まで!~もう許してーー」

滝壺に加えて麦野まで加わるとあつてフレンダは顔を真っ青にしてもがいでいる。さすがに本気で恐怖を感じていふよつだつた。

「なんだかフレンダが超不憫に思えてきました」

「見ている分には楽しいだ

「フレメアはあんな大人になつちゃだめだぞ?お兄ちゃんとの約束だ

「こやあ」

フレンダの悲鳴をBGMに騒がしく夜は更けていった。



～オマケ～

「大人数でお風呂つてのもたまにはいいわね」

「広いお風呂つていいね」

「男に裸見られた……でもそれがいい！」

「もう超慣れました」

「いつの風呂が広いのつてこのためだったのか……？」

「じー」

「ん？フレメアも興味の出るお年頃なのか

「結局私を呼んだのは6Pでもするためか？」

「私は構わない」

「まくとは私のなの……」

「私初めてなのに6人な訳！？」

「…私は超放置なんでしょうね」

「「」やあ。 6人ってなに？」

「興味があるならフレシアは見学するかい？」

「「「「」…？」」「」」

～オワリ～

この後どうなったかは想像にお任せします（笑）

さて日常パートも一区切りついたので次は超電磁砲にいくか禁書に  
いくか…悩みますね…

あと上条さんをどうするか。

出さなければ魔術師戦が大変になるけど出しても相性的に一緒に行  
動させるとか難しいしなー  
さらに出すか出さないかでフラグの建て方も変わるし。

皆さんには超電磁砲にこくのと禁書にこくの、上条さんを出すか出さ

ないか、どちらがいいですか？

明日から大学が始まつてしまつので次の更新はちょっと遅れるかも  
しません。

## 第十一話（前書き）

今回から超電磁砲のストーリーに入ります！

その後は禁書ですね。

ちなみにこの世界では超電磁砲の事件が数日早く起こっています。  
理由は禁書一巻と時系列が被るから（笑）

「ねえほぐと、セブンスミストってお店に連れてって

学園都市に存在するとあるモデルハウス。外観は和風だが中身は洋風であり、家具一つに至るまで電子制御されているという何を考え作られたのかわからない家に北斗達はいた。先日の爆破騒ぎで住んでいたマンションが改修工事されることになり、一時的に引越していた。そして何故か滝壺も引越しのどんぐりに紛れて住みついていた。

「いきなりだな。まあ今日は特に予定もないから構わないが……セブンスミストって最近リニューアルしたっていう服飾店か?」

「ほぐとにジャージ以外の服を選んでほしくて」

「構わないよ。一人は出かけるし久しぶりに一人だけのデートだね」

「うん、楽しみ」

黒夜は仕事で、絹旗は趣味の映画鑑賞に出ており今は家にいない。北斗は普段は一人のどちらかが自分にべつたりのため、たまには一人つきりのデートもいいだらうと快く引き受けたことにした。

「どうせだから一緒に水着も買ってこようか。この前沈利がプライベートプール借りたつて言つてたからさ」

「…ほくとはどんな水着が好き?」

「本人に似合つてゐならそれが好きかな」

「そつか（露出が多い方がいいんだらうか）」

そんな会話をしながら一人は仲好く寄り添いながら出かけて行つた。

「IJの水着はどうかな？似合つてる？」

「…少し露出が激しそぎないか？泳いでたら見えてはいけないものも見えそつなんだが」

セブンスミストの水着売り場。そこで滝壺はいくつか選んだ水着を試着しては北斗に見せて感想をもらっていた。現在滝壺が試着しているのはGストリングタイプのマイクロビキニ。今は下着の上から着ていて、大丈夫なものと見えて、大丈夫な水着ばかりだ。しかし、滝壺が選ぶのは紐のようなスリングショットやCストリングといった布地の少ない露出の多い水着ばかりである。

「それよりこっちの水着はどうかな？似合ひうんだけど」

「わかった。試着するから待つててね」

北斗が選んだのはリングのついたチューブトップタイプのビキニ。これも露出は多い方だが滝壺が選んだ水着に比べれば遙かにましである。滝壺はやや残念そうな顔をしたものの水着を受け取ると試着室の中に消えていった。

「やれやれ…。いくら女性水着売り場だからってオレ以外の男がいる訳じゃないのに恥ずかしくないのかね？」

二人以外にもカップルで来たのか男もその場におり、思わず滝壺を凝視して彼女にしばかれていた。女性陣は自分も露出の多い水着を買おうかどうか迷っているようである。滝壺の試着が終わるまでの暇つぶしに周りを眺めていた北斗だったが向かいの服売り場で見知った顔を見つめた。

「……ちよつとだけ、一瞬姿見で合わせるだけなひ…」

「美琴ちゃんらしい可愛いパジャマだね。とても似合ひてるよ」

「ツ？ ツー？」

そこにいたのは御坂美琴。可愛らしい「トザイン」のパジャマを手にしており、自分に似合つか姿見で確認しているようだった。北斗は純粋な好意で口を出したのだが美琴はひどく驚いているようである。

「な、な、何でアンタがこんな所にいんのよつー…？」

「連れの買い物に付き合つててね。美琴ちゃんを見かけたからつい声をかけてしまつた」

「こきなり声かけてこないでよ。びっくりするじゃない」

「それは悪かつた。それよりその服買うのかい？」

「こ、これはつー……こんな子供っぽい服なんておかしいわよね。アンタもそう思つてるんでしょ？」

「趣味は人それぞれだ。それにさつきも言つただろう?…とても似合つていいと」

「どうせお世辞でしょ?…まあその似合つて言つてくれたのはありがとう…でも勘違いしないでよね!…アンタに褒められたって嬉しい

くないんだからー。」

恥ずかしい」というを見られたかと意氣消沈していた美琴だったが北斗に褒められて照れているようだ。もつとも素直にお礼は言えないようではあるが。

「や、そんな」とより連れと来てゐるつて言つてたけど放つておいていいの? ここ女性服売り場だしどうせ彼女なんでしょう…」

北斗が彼女と来ていると予想した美琴だったが、自分で言つて落ち込んでいるようである。

「あはは、嫉妬してくれてるのかい? やつぱり美琴ちゃんは可愛いなあ」

「な、ば、そ、そんな嫉妬してるなんてあるわけないでしょ! ?」

「ほら、どうじりしないで。それに連れは確かに女の子だけど彼女ではないよ。…………嫉妬してくれて嬉しかったよ」

「…………」

本心を見抜かれて動搖しているのか照れ隠しに放電しようとする美琴。北斗はそれを見て苦笑しながらも美琴の頭を撫でつつ放電を吸収する。もつとも美琴はその後に耳元で囁かれた言葉によつて放電どころか文句を言つ余裕もないようである。そしてそんな二人を

見つめる二対の瞳。

「……ほくと、その女の子は誰？」

「ん？」この子は御坂美琴……って理后！…そんな恰好で出てきちゃダメじゃないか！」

「（お、大きい…）」

いつの間にか北斗の後ろに滝壺が立つており、試着室から飛び出してきたのか下着姿のままである。それはさすがに見かねたのか北斗は自身の上着を脱ぎ、滝壺の肩にかけてやつた。美琴はその恰好より体の一部に目がいってたようである。

「御坂さんのお知り合いですか？さつき試着室から飛び出していった女性もいますけど…」

「あの人スタイルいいねー」

「初春さんに佐天さん……の方は知らないけど男の方は知り合いでよ」

「初めまして、オレの名前は御門北斗。この中の女の子は滝壺理后だ。君たちは美琴ちゃんの友達かな？」

「は、初めまして！初春飾利つて言います！」

「佐天凪子です！ ところでお兄さんは御坂さんとはどういつたご関係で？」

「ちよ、ちよっと佐天さん！こんな怖そうな人にそんな失礼な言い方しちゃ…」

「初春の方が失礼だと思うけど」

「あ、す、すいませんっ！」

さらに加わつた初春と佐天の二人だつたが、佐天はともかく初春は北斗の姿に委縮してしまい余計なことを口走つてしまつていた。

「氣にしてないで、自分の容姿は自覚してるしね。つと悪いけど」  
「こは失礼させてもらひよ? ここの子をここの恰好のまま放置しておくれ  
けにはいかないからね。じゃあまたね、機会があればまた会おう」

そう言つて北斗は滝壺を伴つてその場を離れて行つた。残された三人は今去つていつた一人について思い思いの感想を口にしている。

「いやー見た目は怖い感じの人だつたけどカッコいい人だつたね。なんて言うか…大人つて感じでさ」

「私は失礼なこと言つちやいました……」

「…………やっぱり彼女なんじゃないの？」

「何か言いましたか御坂さん？」

「な、なんでもないわ！それより私たちも他の服でも見に行きましたよ！」

何かを誤魔化すように声をあげる美琴に、訝然としないものを感じる二人だったが、一先ず美琴の言葉に従つようだった。

「あの子のAIM拡散力場は記憶した」

「は？ 体験を使つたのか？」

「愛の前にはそんな物は不要」

「いや、そういう問題じゃないだろ……」

滝壺が愛の力で能力の限界を突破していた。

北斗と滝壺の二人は今度は服を選んでいるようである。一人がこの

「どれか気に入った服はあったかい？」

「ほくとはセンスがいいからどれにしようか迷つ

店に来てから結構な時間が経っているはずだがよく飽きないものだ。  
そんな時、一人の耳に店内放送が飛び込んできた。

『お客様に申し上げます！店内に危険物が持ち込まれたため至急店外に避難してください！繰り返します、店内に……』

どうやら避難勧告のようである。周囲は蜂の巣を突いたような大騒ぎだ。しかし一人は特に焦ることもなくまだ服を選んでいる。

「危険物つてふれんだが爆弾でも仕掛けたのかな？」

「いくらフレンダでも無差別テロみたいな真似はしないだろうさ。これは最近話題の虚空爆破事件つてやつじやないのか？」

「そりなんだ」

「ところで避難しないのか？」

「まだ選びきれてないし…もし危険でもほくとが守ってくれるでしょう？」

「まあ楽に守れるとは思つけどね。店員がいなきや買えないし危険物を処理してくれるよ。理后は一応外に避難していくてくれないか？」

「わかった。気をつけてね」

そう言って北斗は滝壺から離れて行つた。滝壺も暗部であることが  
ら一人にしても問題ないと思ったのだろう。しかしいつたいどうや  
つて爆発物を探すつもりなのだろうか？

「報道によればぬいぐるみなんかに偽装されてるらしいし違和感の  
あるものを探せば問題ないだろ。理后の周りにはなかつたようだし  
な」

いつの間にか北斗の腕からは黒い茨が生えており、不気味に揺らめ  
いていた。

「よしひ、これで全員避難したはず」

協力して避難誘導をしていた美琴たちは現在逃げ遅れた人がいないか確認していた。初春は携帯で連絡をとっているようである。

「白井さんですか？今全員避難したか確認を…」

『今すぐそこを離れなさい…』

「え？」

『過去八件の事件の全てで風紀委員が負傷していますの…犯人の真の狙いは観測地点周辺にいる風紀委員…！今回の中ゲットはあなたですのよ初春つ…』

「おねーちゃん。メガネかけたおーちゃんがおねーちゃんにわ  
たしてつて」

初春に近付いてきたのは小さな女の子。手には不格好なカエルのぬいぐるみを持つている。そのぬいぐるみがいきなり内側に巻き込まれるように圧縮していく。それをみた初春は女の子を抱えてその場を飛び退る。

「！？逃げてください！…あれが爆弾です…！」

「くつー！（レールガンで爆弾）と吹き飛ばすー！」

美琴は爆発を阻止しようとしたレールガンを撃つためのコインをポケットから取り出そうとする。しかし無情にもコインはその手から零れてしまつ。

「しまつー？間に合わ

「やれやれ、手のかかる子だ」

爆発。

「何だ！？爆発！？」  
「例の連続爆破テロだつて！」  
「逃げ遅れた人がまだ中にいるみたいだぞ」  
「風紀委員の子を見たつて……」  
「あの人……」

爆発は外にも届いたようで大きな騒ぎになり人混みができている。その人混みを避けるように路地裏に入つていくメガネをかけた少年がいた。

「ククク…いいぞ、今度こそ逝つただろう。スゴイッ！スバラシイぞ僕の力！！徐々に強い力を使いこなせるようになつてきたッ！！」

少年は何かに歓喜するように身を震わせている。

「もうすぐだ！あと少し数をこなせば無能な風紀委員もアイツラもみんなまとめて吹き飛ばッ…！？」

叫んでいた少年の背後にはいつの間にか回り込んだのか北斗が絶対零度の視線を向けながら佇んでいた。どうやら蹴り飛ばしたようである。

「まったく君も運がない。オレがこの店に来ていなければ警備員に捕まる程度で済んだろうに」

「な、なんだ一体…？」

「オマエが爆弾魔だろ？？大した威力だ」

「な、何の事だか僕にはさっぱり…」

「死傷者は一人も出なかつたがな」

「そんなバカなつー僕の最大出力だぞーー！」

「ふむ」

「い……いや外から見てもスゴイ爆発だから中の人には助からないんじやないかと…………つーつー？」

「聞くに堪えんな」

苦しい言い訳を続ける爆弾魔だったが能力の基点となるスプーンを取り出そうとしたところで自分がいつの間にか組み伏せられていることに驚愕する。

「ハツいつもこいつだ。何をやっても僕は地面にねじ伏せられる……殺してやるッ！お前見たいのが、力のあるやつが全部悪いんだああつー？」

「そのつるせー口を閉じろ耳が腐る」

取り押さえられ喰っていた少年だったが今は腕を押えて悶え苦しんでいる。その腕は捩れてあらぬ方向に向いていた。

「お、俺の腕があああああつー？」

「力のあるやつ？自分はねじ伏せられる？当たり前だろう弱者は強者に喰われるのみだ。弱ければ何かで補えばいい。だが力を得たところでその力を弱者にしか向けないので高が知れる」

「お、お前に何がわかるつ！僕がどんな気持ちで…」

「知らんよ。興味もない。どうせ偉そうなことを言うなと言いたいんだろう？ オレもオマエという弱者に力を向けているわけだしな。だけどこれはオマエが悪いんだぞ？ 無差別にやるからオレみたいなのを招き寄せるんだ。まあ生まれ変わったらうまくやれよ」

少年に触れ水分を吸い取つていく北斗。少年はまだ死んではないものの深刻な脱水症状に見舞われているだろう。

「さあ枯れ落ち……っち

「見つけたわよ！アンタが爆弾魔ね！…………ってあれ？」

美琴がその場に駆け付けた時、そこに残されていたのは干からびかけた少年一人だけだった。

「待たせたね理后。……その服は？」  
「もつたいないから持つてきた」  
「まあ爆発で黒こげになるよりはいいか

店からやや離れたところに北斗と滝壺の二人はいた。滝壺は北斗が選んでくれた服を全て持ってきていたが北斗は気にしないことにしたようである。

「犯人は殺さなかつたの？」

「ちょっと邪魔が入つてね。なんでわかるんだ？」

「さつき路地裏から誰か搬送されたみたいだから」

「なるほどね。まああとで処分しておくれ」

少年の生死を今日の天気の話でもするかのように語る一人。やはり常人とは少し感性がずれているのだろう。

「ところであの犯人のことだけど……」

「何か気になることでも？」

「体冒を使ってなかつたから詳しいことはわからないけどAIM拡散力場が無理やり固められてどこかに繋がつてているような感覚がした」

「繋がつてゐねえ……少し調べてみるとじようか」

そんな会話をしながら一人はその場を後にした。



## 第十一話（後書き）

遅れてしまい申し訳ありません…

大学が忙しいのと予想外に長くなってしまったのが理由です。

今回の話でわかったと思いますがこの小説では上条さんは出ません。  
彼はきっと物語に関係ないところで不幸だー！と叫んでいることで  
しょう（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9256z/>

---

とある茨の禁書目録

2012年1月14日15時45分発行